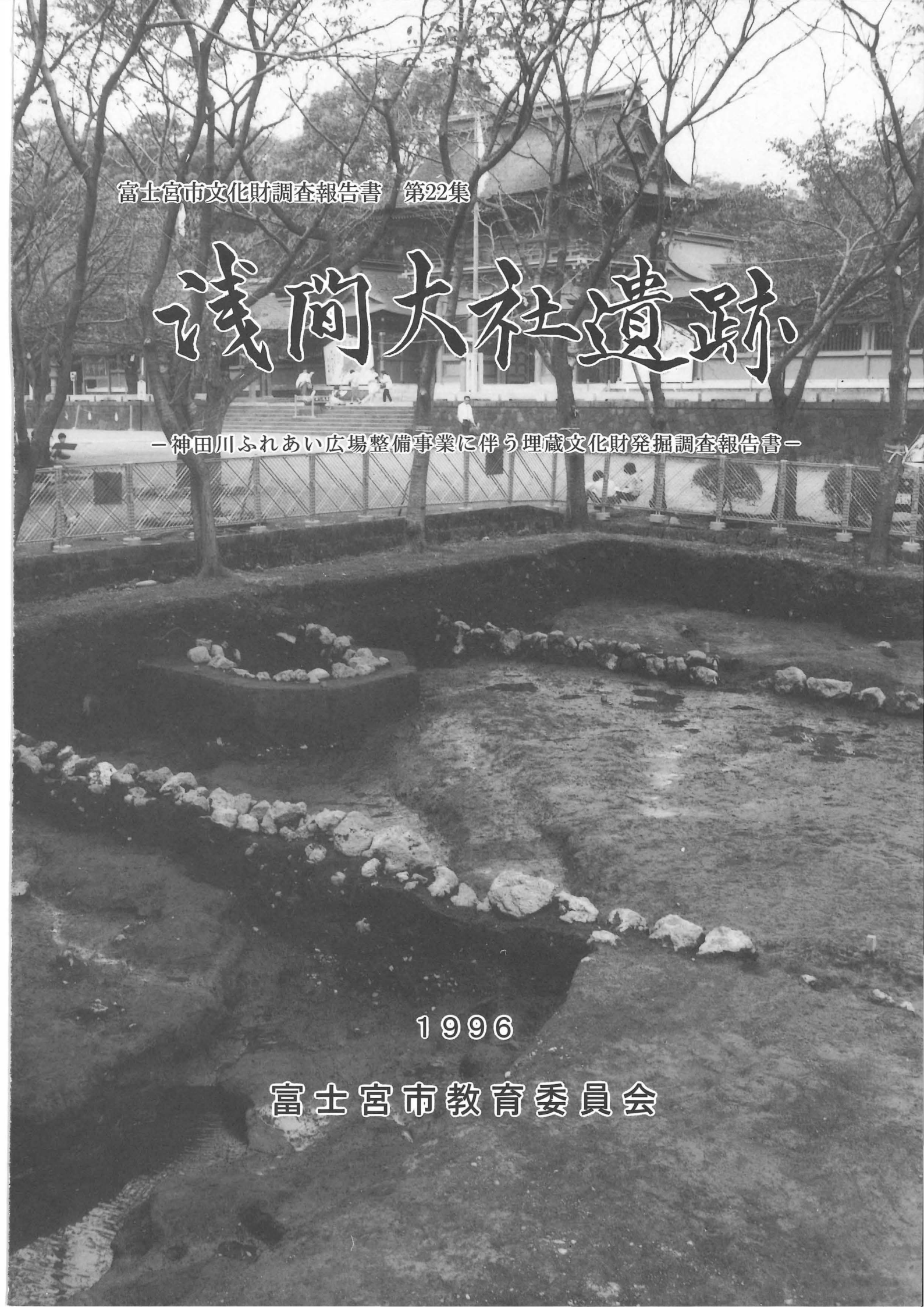


富士宮市文化財調査報告書　第22集

浅間大社遺跡

－神田川ふれあい広場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

1996

富士宮市教育委員会

富士宮市文化財調査報告書　第22集

浅間大社遺跡

－神田川ふれあい広場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

1996

富士宮市教育委員会

表紙の題字は中村雅子氏の揮毫による

序

移り変わりが激しく、多様な価値観にあふれる現代社会において、豊かな人間性と限りない可能性をもとめて、新たな地域文化を創造しようとする国民の努力はめざましいものがあります。

こうしたなかで、われわれの身近にある文化財、わけてもすべての先人がこの国土と関わってきた軌跡への高まりは著しいものがあります。各地域における発掘調査の成果が、広く国民の注目を集め、人々の大きな関心と期待のもとにおかれる状況は、かつてみることのできなかったことであります。

このたびの浅間大社遺跡の埋蔵文化財発掘調査につきましても、ながく境内の地下に眠っていた、その時々の歴史の証が、明らかにされていくことにあらためて感動すら覚えます。

しかし、いまだ人類文明のあけぼのについての経過もさだかではありません。その問題を解明するためには、発掘調査という地味な成果を徐々に積み重ねる以外に方法はありません。こうして遅々ではありますが明らかにされつつある郷土の歴史は、単に学術的意義のみならず、今後の市民生活のなかに根づいた文化行政として、大切に生かされていくべきであろうことに、大きな意義を持たなければならないと思います。

最後になりましたが、本発掘調査にかかわられました富士宮市、ならびに富士山本宮浅間大社の皆様をはじめ、関係の皆様には心よりお礼申し上げます。

平成８年３月

富士宮市教育長　　藤　井　國　利

例　　言

1．本書は静岡県富士宮市宮町1404-1他に所在する「浅間大社遺跡（せんげんたいしやいせき）」の第１次調査、第２次調査の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は神田川ふれあい広場整備事業に伴うもので、富士宮市より調査依頼を受けて富士宮市教育委員会が実施した。

3．調査期間は第１次調査が平成６年８月２２日から同年１０月７日、第２次調査が平成７年９月４日から同月３０日である。

4．発掘調査は富士宮市教育委員会文化課学芸員馬飼野行雄、同渡井英誉を調査担当者として実施した。

5．写真撮影は馬飼野、渡井が行った。

6．本書の執筆、編集は渡井が担当した。

7．浅間大社の歴史と調査との関連については文献史学の立場から、渡井正二先生（富士宮市教育委員会社会教育指導員）、若林淳之先生（静岡学園短期大学学長）より玉稿を賜った。

8．木製品の保存処理は、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所西尾太加二氏にお願いし、同研究所内で実施していただいた。

9．出土遺物のうち、陶磁器類の鑑定については、三島市教育委員会学芸員鈴木敏中、辻真人両氏、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所足立順司氏、島田市立博物館学芸員澁谷昌彦氏にお願いした。

10．調査用のグリットは、発掘区を西から東へアルファベット順、北から南へ算用数字順として、その北西側交点で呼称した。

11．地形図、遺構実測図に記す高度は、全て海抜高度をもって示している。

12．土器観察に記す色調は、土器の最も広い範囲を専有する色合いを原則として取り上げている。色調の観察は、『新版　標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局）で補って判断している。

13．発掘調査および本書発刊に関する事務は富士宮市教育委員会文化課文化財係が担当した。

14．本報告による出土品および記録図面、写真などは、富士宮市教育委員会で保管している。

15．発掘調査から報告書作成に至るまで、次の方々からご指導、ご協力をいただいた。記して感謝する次第である。（敬称略）

足立順司、池谷初恵、植松章八、加藤政司、佐藤達雄、澁谷昌彦、鈴木敏中、辻真人、西尾太加二、松井一明、若林淳之、渡井正二、渡瀬治、富士山本宮浅間大社

目　　次

Ⅰ．はじめに …… 1
Ⅱ．調査の経過 …… 1
　第１次調査 …… 1
　第２次調査 …… 1
Ⅲ．位置と環境 …… 3
　１．地理的環境 …… 3
　２．層序 …… 4
　３．歴史的環境 …… 5
Ⅳ．遺構と遺物 …… 10
　１．近代～現代 …… 10
　２．中世～近世 …… 12
　　溝１ …… 12
　　井戸 …… 14
　３．遺物と出土状況 …… 15
Ⅴ．まとめ …… 19
　１．遺構について …… 19
　２．遺物について …… 20

《コメント１》出土陶磁器類と浅間大社の信仰　渡井正二 …… 37
《コメント２》浅間大社境内遺跡について　若林淳之 …… 39
報告書抄録 …… 42

表　目　次

第１表　周辺の遺跡 …… 7
第２表　溝１．出土遺物の時代別構成表 …… 16
第３表　溝１．出土遺物の時代別推移１ …… 16
第４表　溝１．出土遺物の時代別推移２ …… 16
第５表　出土遺物観察表１ …… 34
第６表　出土遺物観察表２ …… 35
第７表　出土遺物観察表３ …… 36

図版目次

第１図　調査区位置図 …… 2
第２図　地質概略図と遺跡の位置 …… 3
第３図　第１次調査区土層図 …… 5
第４図　周辺遺跡分布図 …… 6
第５図　溝１土層図（第１次調査区北壁） …… 13
第６図　溝１（第２次調査区）遺物出土状況図 …… 18
第７図　現在の浅間大社と調査区 …… 19
第８図　遺構全体図 …… 21
第９図　遺構実測図（井戸・溝１堰） …… 22
第10図　出土遺物実測図１ …… 23
第11図　出土遺物実測図２ …… 24
第12図　出土遺物実測図３ …… 25
第13図　出土遺物実測図４ …… 26
第14図　出土遺物実測図５ …… 27
第15図　出土遺物実測図６ …… 28
第16図　出土遺物実測図７ …… 29
第17図　出土遺物実測図８ …… 30
第18図　出土遺物実測図９ …… 31
第19図　出土遺物実測図10 …… 32
第20図　出土遺物実測図11 …… 33

写真図版目次

写真図版１　第１次調査区　《全景（南→北）　全景（南→北）》
写真図版２　第１次調査区　《溝１北側部分（南→北）　全景（南東→北西）》
写真図版３　第１次調査区　《溝１．溝２（東→西）　溝４（北→南）》
写真図版４　第２次調査区　《全景（南東→北西）　全景（東→西）》
写真図版５　第２次調査区　《溝１．石組２（北東→南西）　石組３（西→東）》
写真図版６　出土遺物①
写真図版７　出土遺物②

Ⅰ．はじめに

浅間大社遺跡の発掘調査は、浅間大社境内において富士宮市が平成６年度、平成７年度の２ヶ年に亘って計画した神田川ふれあい広場整備事業に伴う埋蔵文化財の事前調査として実施したものである。事業の対象地は、約4,870㎡の面積を測るが、公園という施設の性格上、工事による掘削が地下に及ぶ範囲と遊具などの恒久的な構造物が建てられる部分についてその調査の対象地とした。その結果、調査対象地は神田川に沿った事業対象地の北側約2,500㎡がそれに相当することになった。

調査は、平成６年５月９日～５月13日に行った試掘調査から始まる。調査は、既存の噴水池などを避けて、９ヶ所のトレンチを設定して遺構の検出に努めたが、調査対象地の東側は１ｍ程度の深さでシルト層に覆われ、近現代の水田跡と思われる平坦面が確認されているだけであった。しかし、神社の境内に接する西側においては、溝状の落ち込みが認められ、近世を主体とした陶磁器が顕著な出土を示したため、境内に沿って南北に長い東西幅15ｍ程度についての本格的な調査が必要であると認定された（第１図）。

調査は、広場の２ヶ年に亘る整備事業に併せて第１次と第２次に分けて実施され、前者は、平成６年８月22日～同年10月７日の、後者は、平成７年９月４日～同年９月30日の調査期間を要し、それぞれ300㎡と202㎡の広さがその対象となった。

Ⅱ．調査の経過

第１次調査

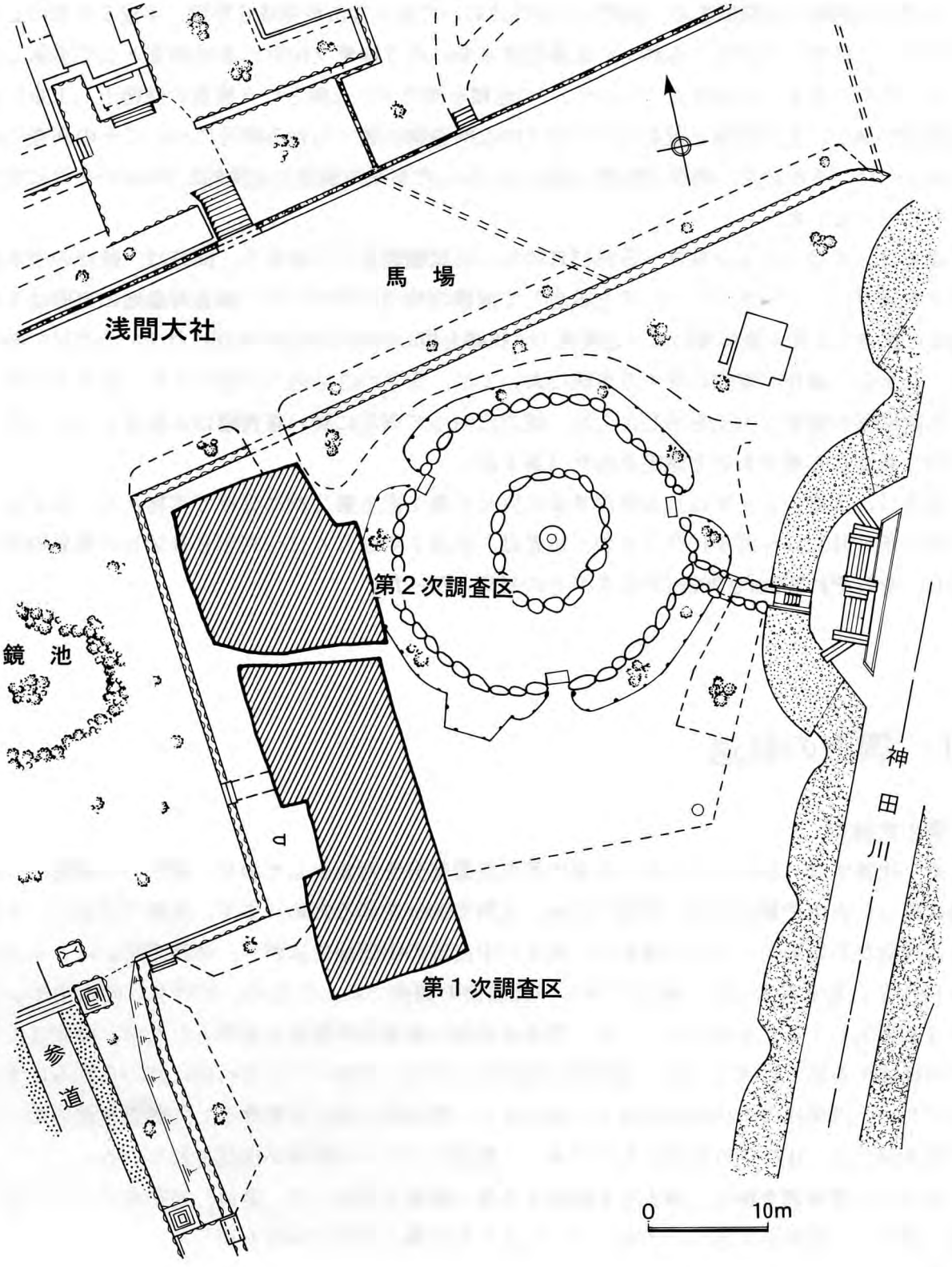
第１次調査は、神田川ふれあい広場の遊具設置部分を対象としており、現状の公園建設の造成に際した客土や耕作土が、南側で80㎝、北側で90㎝を測るため、まず、重機で慎重に、それらの排除から始めた。今回の調査は、潤井川中流域の山間地に広がり、沖積平野がほとんど認められない富士宮市では、極めて珍しい低湿地の調査であったため、常時２㌢の水中ポンプを３基投入してそれを進めた。一応、遺構確認面は黄褐色砂質層を基準としたが、調査区の大半が後述する溝１に占有され、基準層は調査区の北側と南側のそれぞれ隅に認められるにすぎないため、近現代の水田の造成痕や石組みなどの構造物の検出を基準として調査を進めた。この調査部分は、比較的近現代のものが多く、数回に亘る水田開発が確認されている。

近現代の遺構調査後は、調査区を縦断する溝の調査を実施した。溝は、当初考えていたより幅、深さとも規模が大きく、予定していたよりその覆土排除に時間を要した。

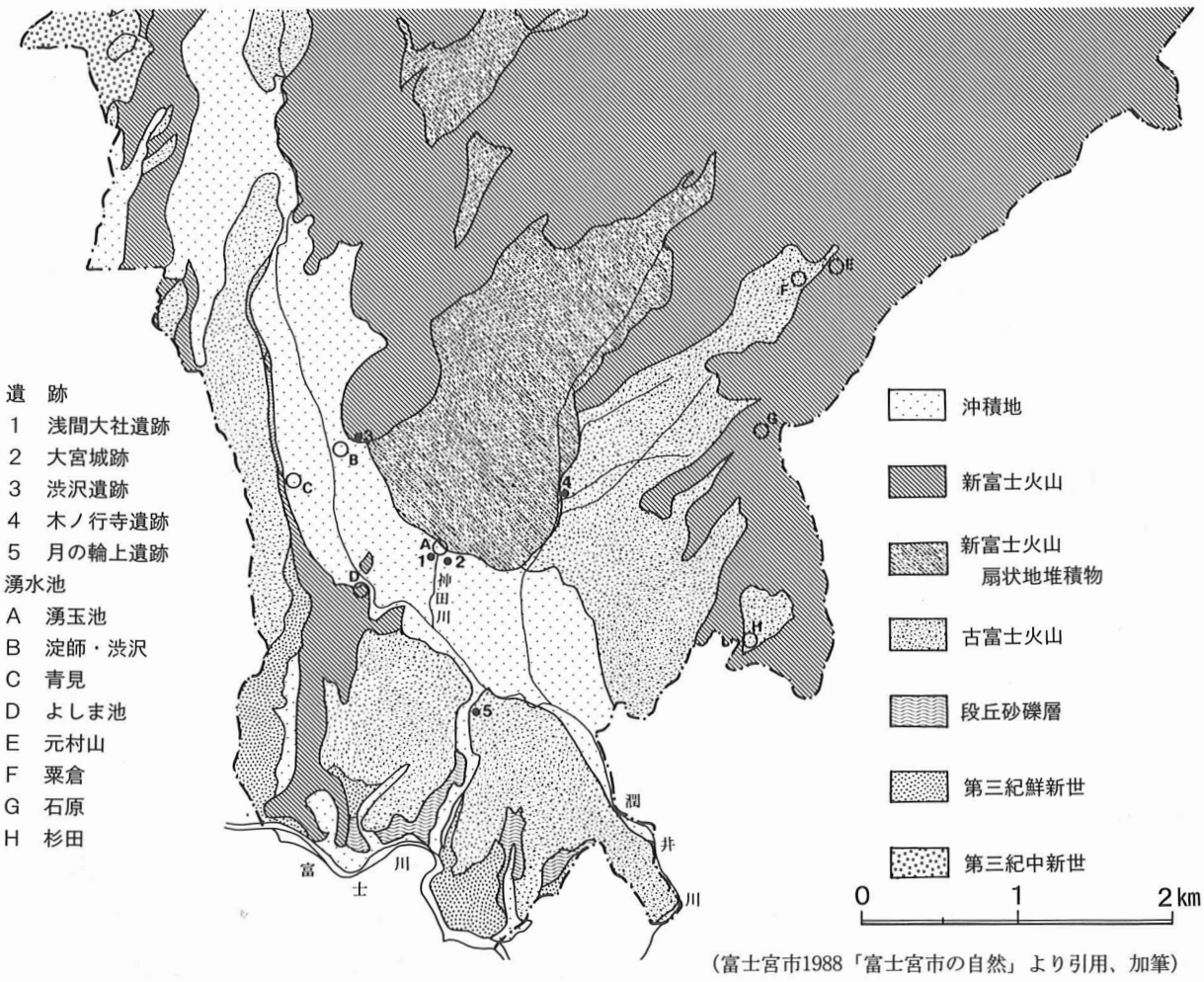
第２次調査

開発事業に関連して２回に分けて調査を実施したが、第２次調査は、試掘調査などの成果を踏まえて、第１次調査部分の北側をその対象とした（第１図）。

平成６年11月８・９日に遺構の展開を把握するために、トレンチ４ヶ所を設定した試掘調査を実施し、第１次調査の溝がその北側まで延びていることを確認してから本格的な調査に取り掛かった。



第１図　調査区位置図



（富士宮市1988「富士宮市の自然」より引用、加筆）

第２図　　地質概略図と遺跡の位置

Ⅲ．位置と環境

１．地理的環境　（第２図）

浅間大社遺跡の東側を南北に流れる神田川は、市内でも有数な湧水地のひとつであり、昭和27年に国の特別天然記念物に指定されている湧玉池を水源としているが、この湧玉池は、浅間大社遺跡の中にあり、今回の調査地点の北90mほどにその湧水点が位置している。このように、調査地点は、神田川により形成された沖積地内として捉えられ、川の水源に程近い部分に当たると言える訳である。水源であるこの湧水地は、重層的な構造を持つ富士山と密接な関係の中で、山麓端に多く点在する湧水群のひとつとして捉えられる。

富士山は、小御岳火山、古富士火山、新富士火山が重なり合って現在の容貌を表している。小御岳火山は、その噴出年代が10万年前とも、40万年前とも言われている古い山で富士山の基盤を成している。古富士火山は、約８万年前から約１万５千年前までの活動期を経て成立した火山で、溶岩（玄武岩質）、火山砂、火山灰及びその混合物からなる多量の集塊質泥流を噴出した。この集塊質泥流の岩相は、玄武岩類の火山角礫を含む火山灰質の溶岩（凝灰角礫岩）で、極めて固結度が高く、不透水性である。この性質は、後述する新富士火山の溶岩流のそれと大きく様相を違えており、湧水地が富士山山麓を弧状に点在する大きな要因となっている。

新富士火山は、今から１万４千年前に活動が始まる火山で、現在の富士山の大半を覆い尽く

している。特に、３段階に分けられて捉えられているその活動期の最も古い旧期活動期の溶岩流は、広範囲の分布を示すため、中期及び新期の活動期に対応する噴出物が覆った後も山麓部分に沿った弧状の広がりとして認識される。この溶岩流は、各地域で富士宮溶岩、大渕溶岩、万野風穴溶岩などの名で呼ばれている。浅間大社遺跡の北側に広がる丘陵は、その富士宮溶岩流の末端部分に当たり、神田川流域の沖積地はその丘陵を背後に望む位置にある。今回の調査地点は、ちょうど沖積地と丘陵との境に程近く、新富士火山の溶岩流とその下位の古富士火山の泥流層とが露呈する部分として捉えられるわけで、神田川が流れる谷の谷頭で標準的な地質が観察できる部分である。そして、この新富士火山の噴出した溶岩や火山砂礫層の性質が透水性なので、地下水などを不透水の古富士火山の集塊質泥流まで浸透させ、古富士火山の泥流と新富士火山の溶岩流とが露呈する部分に地下水が湧き出るようになり、そのひとつとして、この湧玉池を上げることができる（小川・加納1988)。

文　献

小川賢之輔・加納実1988「§２　富士宮市域の富士火山の地質」『富士宮市の自然』
富士宮市

２．層　序

調査地点の土層は、砂層と粘土層が互層をなす典型的な沖積地内の層序を示すが、近代～現代に数回に亘る削平が行われているため、基準となる層位が分かる部分は少ない。ただ、神社に近い調査区の北側地区では、ほとんどその影響を受けない箇所が、僅かながら点在する状況で確認されている。

ここでは、標準的な土層の堆積が確認された第１次調査区北壁での状況について解説する。第１次調査区北壁付近は、結果的に現在の地表面から140cmほど掘り下げたが、その壁面は５つに分層することができた（第３図)。

第１層　表土層

客土と認識できる層で、児童公園などの造成により積まれたものである。この層は、層厚50～80cmほどを測り、ガレキの混入が比較的多いものである。

第２層　暗褐色土層

粘土質の層で、１cm大の小石が目立ち、鉄分の混入が見られる。近代以降の陶磁器の包含が比較的多い層。

第３層　黄褐色土層

黄褐色～白色の粘土層。

第４層　灰褐色土層

灰褐色の粘土層で、小石などの混入の少ない純粋な粘土の層。

第５層　青灰色土層

青灰色の砂層。細かい砂の層であるが、２～３cm大の小石の混入も目立つ。この下層には黄褐色の砂層が認められる。

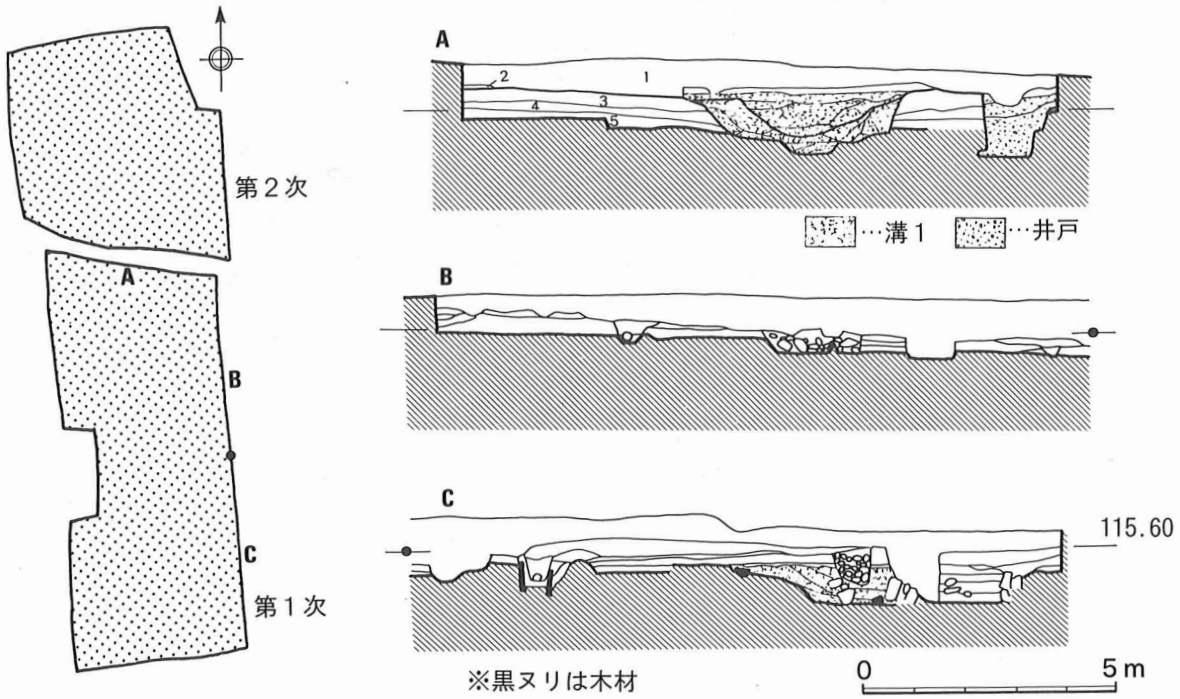
第２層は、遺物包含層と認識されるが、比較的締まりの弱い層で、耕作土としても捉える事ができる。これは、第１層の影響を直接受けており、部分的にしか確認できない。

第３層と第４層は、共に粘土層であるが、締まりの強い第３層に比べて第４層は軟質のもので、その性格は大きく異なるものである。今回の調査は、原則として比較的安定している第３層上面を遺構の確認面としている。

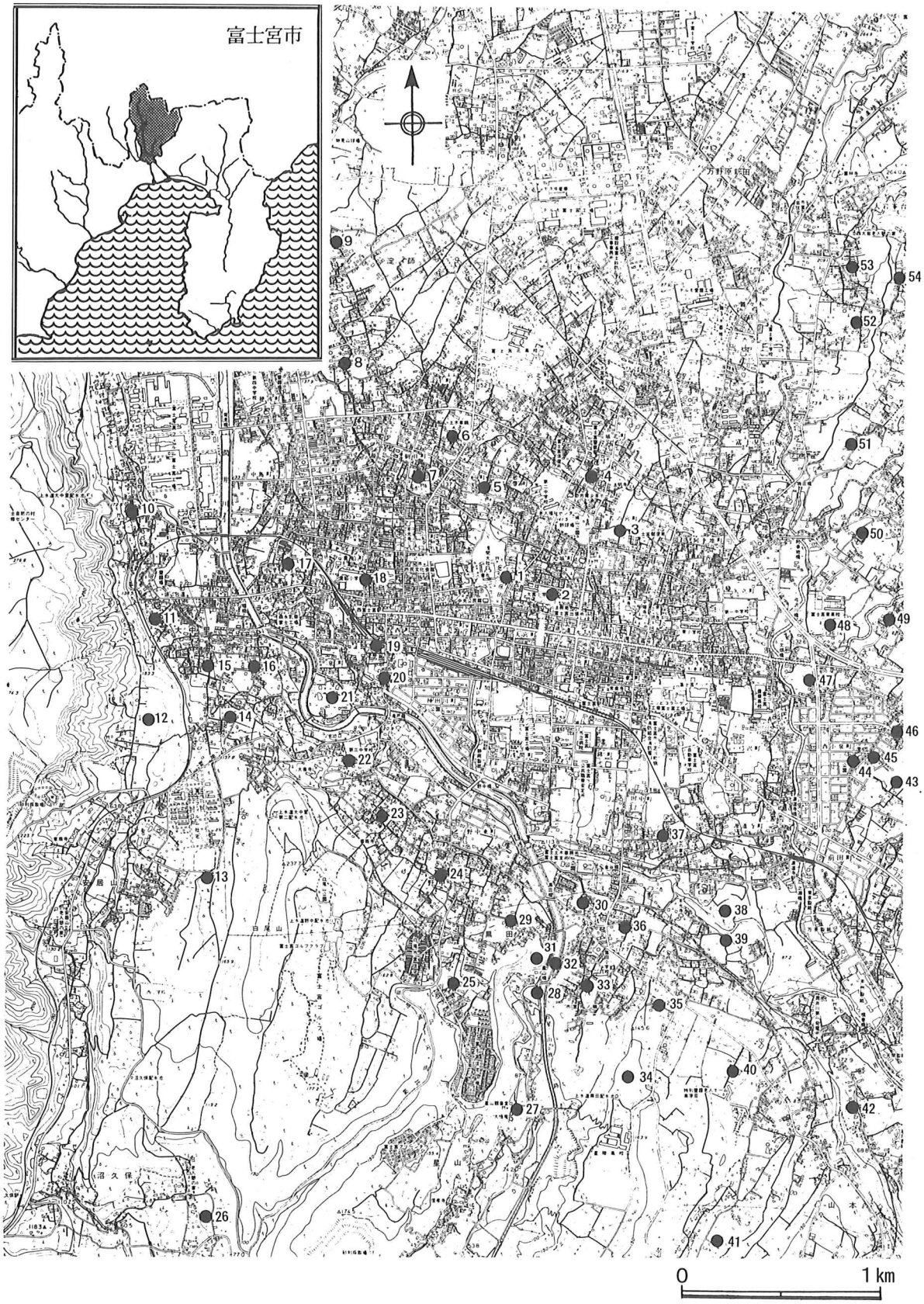
３．歴史的環境　（第４図、第１表）

浅間大社遺跡は、その名のとおり富士山本宮浅間大社（浅間神社）に関連した遺跡で、直接その歴史を表す部分が多い。今回の調査地点でもそれに関連したと思われる遺構、遺物が、検出されたものの大半を占める。そのような状況を踏まえて、浅間大社遺跡周辺の歴史的環境を考えると、まず、この神田川あるいは潤井川流域の沖積地に最初の人の生活の跡が窺えるのは、第17図の132の土器からも分かるように、弥生時代後期もしくは古墳時代前期からである。

この沖積地西側の丘陵部に位置する滝戸遺跡（22）では、縄文時代早期～後期の有力な集落が確認され、その北側の別所遺跡（12）では、弥生時代中期前葉の土器、石器が採集され、渋沢遺跡（９）（富士宮市教育委員会1989）では、その時代の墓域が調査されている。また、沖積地の東側は、潤井川の支流として弓沢川が富士山の斜面に沿うように南北に流れており、その弓沢川東岸には、縄文時代中期の竪穴住居が調査されている上石敷遺跡（46）（富士宮市教育委員会1985）がある。このように、現状の考古学的な成果では、沖積地周囲の丘陵部に縄文時代からの活発な活動の痕跡が残されているが、沖積地内の本格的な開発は、弥生時代の後期からのようである。



第３図　　第１次調査区　土層図



第４図　　周辺遺跡分布図

第1表　周辺の遺跡

番号	遺跡名	時代	標高m	地目	種別	番号	遺跡名	時代	標高m	地目	種別
1	浅間大社遺跡	縄文(早)、古墳、中世、近世	120	境内	散布地	28	月の輪平遺跡	旧石器、縄文、古墳(前)	125	放水路	集落
2	大宮城跡	室町	130	宅地	城館	29	坊地上遺跡	縄文(早・中)、古墳(前)	135	宅地	散布地
3	若の宮遺跡	古墳(前～後)、中世	140	宅地	散布地	30	南部谷戸遺跡	旧石器、縄文、古墳(前)	113	宅地	集落
4	城山遺跡	古墳(前～後)	150	宅地	散布地	31	坊地南遺跡	古墳(前)	125	林	散布地
5	二ノ宮遺跡	古墳(前～後)	142	境内	散布地	32	月の輪下遺跡	古墳(前)	110	放水路	集落
6	琴平遺跡	古墳	144	畑・宅	散布地	33	月の輪上遺跡	弥生(後)、古墳(前)、近世	125	宅地	集落
7	福地神社遺跡	弥生(後)、古墳(前)	138	境内	散布地	34	高原城跡	中世	170	山林	城館
8	上中村遺跡	弥生(後)～古墳(前)	140	宅・畑	散布地	35	奥山地遺跡	縄文(早・前)、古墳	133	畑	散布地
9	渋沢遺跡	弥生(中)、近世	160	畑・宅	散布地	36	五反田遺跡	縄文(中)、古墳(前)	113	宅地	散布地
10	根方遺跡	古墳(前)	145	原・田	散布地	37	田中遺跡	弥生(後)	110	宅地	散布地
11	大中里坂上遺跡	縄文(中・後・晩)	135	畑・宅	散布地	38	杉林遺跡	弥生(後)～古墳(前)	100	畑	散布地
12	別所遺跡	縄文(後)、弥生(中・後)	185	林・畑	散布地	39	下ヶ谷戸遺跡	弥生(後)～古墳(前)	103	畑	散布地
13	上ノ原遺跡	縄文(中)、古墳(前)	172	畑	散布地	40	上高原遺跡	縄文(中)	132	畑	散布地
14	大中里坂下遺跡	縄文(中・後)、古墳	130	田畑	散布地	41	出口遺跡	縄文(中)、古墳(前)	122	畑	散布地
15	福伝遺跡	縄文(後)、古墳	130	宅地	散布地	42	吉野屋敷	中・近世	75	宅地	城館
16	甲石遺跡	縄文(中・後)、古墳	130	宅地	散布地	43	石敷遺跡	古墳(前)	110	田畑	散布地
17	東田遺跡	弥生、古墳、奈良、平安	130	保育園	散布地	44	向田遺跡	古墳(前)	115	宅地	散布地
18	貴船町遺跡	古墳(前～後)	120	小学校	散布地	45	虚空蔵社古墳	古墳(後)	114	原野	古墳
19	西町遺跡	弥生(後)、古墳(前)	120	宅地	散布地	46	上石敷遺跡	旧石器、縄文、古墳(前)	120	田	集落
20	羽衣町遺跡	弥生(後)、古墳(前)	115	工場	散布地	47	中沢遺跡	古墳(後)、奈良	120	田	散布地
21	泉遺跡	弥生(後)、古墳、平安、近世	125	宅地	散布地	48	木ノ行寺遺跡	古墳(後)、古墳(前)、奈良	140	高校	散布地
22	滝戸遺跡	縄文(中・後)～古墳(前)	130	中学校	集・祭	49	寺内山ノ神古墳	古墳(後)	143	原野	古墳
23	野中向原遺跡	縄文(中・後)、古墳(前)	140	宅地	散布地	50	三ツ室遺跡	縄文(前)、古墳	155	田畑	散布地
24	野中中村遺跡	縄文(中)、古墳(前)	127	宅地	散布地	51	丸ヶ谷戸遺跡	縄文(中・後)、古墳(前)	175	畑	散布地
25	黒田向林遺跡	縄文(早)	155	宅地	集落	52	時田遺跡	縄文(中・後)、古墳	192	畑	散布地
26	谷外遺跡	縄文(中・後)、古墳	70	田畑	散布地	53	宝田遺跡	縄文(中・後)、古墳、中世	210	畑	散布地
27	倭文神社遺跡	縄文(早)、古墳(前)	97	境内	散布地	54	辰野遺跡	縄文(早・中～後)、弥生(中)、古墳	205	田畑	散布地

沖積地内で本格的な発掘調査が実施された泉遺跡（21）（富士宮市教育委員会1993）の動向を見てみると、まず、弥生時代後期後半を迎えて、すぐ、集落を囲郭すると思われる溝に東遠江の菊川様式の土器が廃棄されている事が確認されている。このことは、弥生時代後期前半に環濠を保有して造営されていた集落がひとつの画期を迎えたことを意味している。調査区の関係上、明確な出土は確認していないが弥生時代後期前半の遺物やそれに伴う住居などの遺構は、この溝の内側に展開しているものと思われる。

この溝の廃絶後、しばらくの空白をおいて古墳時代前期に改めて集落の造営が始まる。この段階の前半は、播磨系の庄内甕や尾張系のＳ字甕などの外来系土器を多く搬入しており、凡日本的に各地の土器が動き出す事象に呼応して、その受容する側としての立場を保ちながら集落を成立させている。そして、この集落は、星山谷の河岸段丘上に立地している月の輪平遺跡（28）（富士宮市教育委員会1981）などと同様に古墳時代前期をもって忽然と終わる。

泉遺跡で、これ以後再度、開発の跡が窺えるのは、６世紀に入ってからで、７世紀まで活発な集落の造営が確認されているのと、９世紀～10世紀に集落が形成される事である。６世紀～７世紀の集落は、近年、浅間大社遺跡に隣接する大宮城跡（２）や上石敷遺跡の北側で上石敷遺跡同様沖積地を望む位置にある木ノ行寺遺跡（48）（静岡県教育委員会他1995）などで確認され、調査されている。これらは、いずれも沖積地に対する依存が極めて高いと思われる立地を示しており、水田開発を筆頭にした新たな農地の開発に伴うものとして、農業の経営基盤の質的変化に同調していると捉えられる。この変化は、木ノ行寺遺跡で発見されている溜井と称される農業施設に、適格に、反映されている。

９世紀～10世紀の集落は、富士宮市の位置している潤井川上中流域において、この泉遺跡以外にまだ発見例が無く、極めて希な存在と言える。この時期の沖積地内微高地への進出についての具体的な理由は分からないが、官衙クラスの集落と目されている富士市の東平遺跡（富士市教育委員会1981）が終焉を迎えた頃の動きとして捉えられることから、富士市域を中心とした旧東海道沿いの律令時代の計画的な集落の消長に連動した集落の成立があったものと考えられ、10世紀代の記録が頻繁に残る富士山の活発な噴火活動に呼応するかのように短期間で終焉を迎える。以上のように沖積地内の泉遺跡では、弥生時代以降、断続的ではあるが、集落の造営が脈々と行われた事が分かる。このことは大宮城跡でも相当することで、大宮城築城以前に造られた古墳時代前期と前述のような６世紀～７世紀の集落が、それぞれ確認されている。

中世の遺跡は、大宮城跡や吉野屋敷跡（42）など城館や武家屋敷の一部が知られているが、あまり多くその存在は知られていない。大宮城や浅間大社に関連した門前町などが付近に存在するものと思われるが、旧大宮町界隈の市街地に内包されているようで、なかなか確認は難しい。このことは続く近世においても同様で、近世において爆発的に大衆化した富士山の山岳信仰に関係した遺跡が登山道沿いにあるものの、総体的に遺跡として認識されているものは少ない。

大宮城は、近年の考古学的な調査で12世紀前後の建物の存在が確認され、築城時に関わる状況が徐々に解明されつつある。この時期の城の築城に関する直接的な建物は、まだ確認されてはいないが、新たな土地の利用が開始されたのは事実であり、平安時代の末期には「中世居館」として整備された可能性は極めて高い。

この大宮城も天正10年（1582）「天目山の戦い」で武田氏が敗れたのを機に、後北条氏により

焼失され廃城となり、以後再興されることはなかったようである。このように、大宮城は、11～12世紀から16世紀後半までの造営が窺われる中世の城館のひとつと言える。昭和59年の富士宮市立大宮小学校屋内運動場建設に伴う発掘調査では、大宮城二ノ曲輪（大宮神田曲輪）の一部が調査され、５棟の建物跡が検出されている（富士宮市教育委員会 1986)。

近世の遺跡は、まだ、調査者の見識に左右される部分が多く、その認定さえ、おぼつかないのが現状である。そのため、前述のようにその数は限られている。浅間大社遺跡の周辺では、月の輪上遺跡（33）で６棟の建物からなる屋敷跡が調査されている（富士宮市教育委員会1995)。また、木ノ行寺遺跡では、田畑に関連した平行する２条の溝が検出されている。さらに、月の輪上遺跡、丸ヶ谷戸遺跡（51)、峯石遺跡、若宮遺跡、代官屋敷遺跡など各遺跡で、当該期の円形土坑群が調査されている。この土坑は、径１ｍ前後の大きさを測るもので、畑地における農業施設に関係したものであるとされ、通常、複数で集まって発見されている（富士宮市教育委員会 1994)。このほかに近世の遺物が採集されている遺跡としては、泥面子、土人形、陶器が表採されて渋沢遺跡（註）や発掘調査中に19世紀の灯明皿が出土している泉遺跡などが上げられる。

以上がこれまでに考古学的な調査が行われている近世の遺跡であるが、これらの諸遺跡は、泉遺跡を除いて丘陵上の平坦地に立地し、いずれも農村あるいは田畑の耕作に関連した様相を示すもので、集村的な町並みなどが分かる遺跡はまだ確認されていない。

註

渋沢遺跡の近世の資料については、遺跡内の地主の一人である荻精吾氏より多くをご教示いただき、氏が畑地より採集された資料について、氏のご好意により実見させていただいた。氏の話によると、これらの資料は、渋沢遺跡で、弥生時代中期初頭の良好な資料が出土しているのと同じ地点からのものが多いと言うことである（富士宮市教育委員会1989)。

文　献

富士宮市教育委員会 1989 『渋沢遺跡』
富士宮市教育委員会 1985 『上石敷遺跡』
富士宮市教育委員会 1993 『富士宮市の遺跡』
富士宮市教育委員会 1981 『月の輪遺跡群』
静岡県教育委員会・富士宮市教育委員会 1995 『木ノ行寺遺跡』
富士市教育委員会他 1981 『東　平』
富士宮市教育委員会 1986 『大宮神田曲輪』
富士宮市教育委員会 1995 『月の輪遺跡群Ｖ』
富士宮市教育委員会 1994 『猪之頭養鱒場内遺跡』

Ⅳ．遺構と遺物

浅間大社遺跡の今回の調査地点における遺構は、11世紀後半以降の土器を覆土中に内包する大型の溝１と近世の井戸１基が主なものである（第８図）。これらは、19世紀代になると人為的に埋められているようで、近代まで継続しない。この項では、この２つの遺構について詳しい解説をする。なお、近代から現代にかけても第８図に示したように石組、溝、杭列、畦畔などが確認されており、何度かに亘る土地利用の様子が窺われる。それについても概要を述べることとする。

第１次調査と第２次調査は、２ヶ年に亘るが、調査区が近接し、同一の遺構が両地区に跨がっているので、ここでは両方を一括して扱う。

１．近代～現代

第８図の遺構全体図で分かるように、形態の異なる石組みの遺構が、９基確認されているが、それぞれの時間的な位置づけや相互の関連などは、分からない部分が多い。

石組１と石組２はそれぞれ対応する石組で、680cmの間隔を開けて平行して東西に延びるもので、互いに対面する側に面を持つ。両石組の石の石材は、周辺で産出される新富士火山の溶岩（玄武岩）で、それを荒割して使われている。石自体の規格は、その面が約20cmから約50cmまで測る四方の規格性に乏しいものであるが、控えが30～40cm程度の均等の幅のものが選定されている。石の形は、角錐形に荒割されたものを基本形とするが四角形のものもあり、形の上でも大きさ同様規格性は追えない。石積みは、石組１がＣ－２からＤ－２グリットにかけて小さめの石を２段に積んでいる状況が確認されているものの、他は１段分しか残っていない。石組２は確認されている面での天端の高さが、ほぼ水平であるが、この部分は後述する溝１に掛かり、基盤が軟弱なため、やや小型の石による２段ないし３段の石積みが認められる。そのため、石組の根は、Ｃ－３グリットのＣライン付近で最も深くなり、石組の東端とは比高差50cmを測る。これらは、石垣で言うところの野石積みの技法で構築されているが、石の整形や石積みなど全体的に粗雑な作りの部分が多い。

石組２は、Ｄ－３グリット内で消失し、それより東側では確認できないが、継続して延びていたものと思われる。そのグリット内では、その石組の北側に側溝が付随していたようで、その痕跡が明瞭に残る。

２つの石組が対になったこの構造物の年代は、石組１の裏込めに第10図－６や第12図－55の陶磁器が含まれていたり、石組２が、19世紀前半代の陶磁器を覆土中に含む溝１を切って構築されているため、19世紀後半以降に作られたものであると想定される。石組１の裏込めに明治時代以降の陶磁器が認められない点からは、明治時代でも極めて早い段階に構築された可能性が指摘できる。この石組は、その後、一面シルト層に覆われてその機能を停止しているが、そのシルト層内には19世紀後半～20世紀前半代の陶磁器の出土が認められる。

以上のように、この石組は、ほぼ明治時代の間に機能していた石組と理解され、その形状から東西方向に延びる道状の施設が想定される。今回の調査では、唯一、現在の浅間大社の区画と一致する遺構として、この石組を伴う道は評価され、神社に付帯した施設であったと捉えられるものである。具体的な神社との関連については、方向が現在の馬場と同一である点やその

道幅がちょうど馬場の1/2である点などが上げられる。ただ、この道は、その西側に「鏡池」が位置しており、直接西側に連続していないようである。この道の展開については、まだまだ十分な検討が必要である。

石組３は、石組１と石組２の廃絶後に作られた円形の石組み遺構で、径250cm、深さ55cmの大きさを測る。壁面は、残りの良い南側で、その上半部分に３段程度の玄武岩を主体とした自然石による石積みが施される。石積みは、傾斜を持って積まれており、一番高い外側部分に最も大きな石が使用されている。この石組は、後述する溝１の真上に構築されているため、その底面は軟弱で、開口した土坑の状態では使用に適さないものであり、規模や形態より井戸などの機能も考慮されるが、浄化した水の確保は極めて困難であると言わざるを得ない場所に位置している。遺物などの出土も認められないため、この石組の詳細な性格は分からないが、現在の神社境内に点在する多数の植木の根回しに見られる円形の石列に、その規模が類似する点だけは指摘される。

石組４は、Ａ～Ｄ－９グリットで東西に連続する石組で、幅90cm、深さ80cmを測る溝状の掘り方に玄武岩を主体とした自然石を充填している。

石組５は、Ｂ－８グリットの調査区西壁際で検出された石組で、弧状に配石されている。石は、ほとんどが玄武岩で、円弧の外側に幅50cm程度の大型の石を並べ、その内側に人頭大の石が、ややまばらな状態で置かれている。石は、偏平のものが選定されており、平坦な面を作り出すように並べられている。検出されている部分の状況では、径440cm程度の円形の配石が想定される。

石組６と石組７は、幅140cm、深さ45cmを測る長方形の掘り方に、大小様々な石を充填している。用途などは分からない。

石組８は、調査区内で長さ600cm程が確認されている暗渠で、Ｄ－６グリットに位置する。この暗渠の掘り方は、長方形の溝状で、幅50cm、深さ30cmを測り、その底面は、標高115.20m程度で、ほぼ水平となっている。暗渠の内部は、両脇に10cm×15cm程度の自然石を置き、天井石として大きなもので幅30cm～40cm、高さ20cmほどの、やや偏平な石を設置している。天井石の両側には、裏込めとして拳大の石がはめ込まれ、天井石を固定している。これらの石によって暗渠の中には、幅10cm、高さ12cm程度の空間が形成され、水路状の形状が想定される。ただ、この遺構の先端は掘り方が立ち上がり、水路としては閉鎖した状況にある点は注意されよう。そして、この部分には幅15cmほどで開口部が認められ、石の設置されない部分がある。これは、連続した水の流出を目的にしたものではなく、この部分で、水量の調整をしたもののようである。そのために底面を水平にしたり、先端に開口部を形成しているようである。いづれにしても、この遺構については、調査範囲が限られているため、摂水の方法や具体的な排水目的など分からない部分の方が多い。

溝２は、Ｃ－６グリット内でほぼ直角に屈折する溝で、Ｃ－８グリットまでその痕跡が窺われ、全長1550cmほどを確認している。幅は50cm、深さ30cmを測る溝であるが、屈折部付近から南側の溝１による影響のため地盤が軟質になっている箇所では、杭列として認識される。底面は、標高115.20mほどを全域で測り、ほとんど傾斜していない。

石組８がこの溝２の屈折部に対応するように方向を合わせ、近接しており、相互に関連していた可能性が指摘できる。

溝３は、杭とその杭に編み込んだ竹からなる柵（しがらみ）を両側の壁にする溝で、幅40cm、深さ50cmの規模を測る。石組４と平行しており、互いの関連が窺われる。また、その形態より畦畔になると思われる幅100cm、高さ35cmを測る高まりが、南側に付随している状況を断面の土層から観察している。

溝４は、調査区の南東隅を北東－南西に走る開渠で、幅100cm、深さ60cmの規模を測る。両壁は石積みで構築されており、比較的堅固な作りになっている。石積みは、40cm～50cm四方の面を持ち、控え30cm～35cm程度の四角形の石により構築されている。調査では、それを２段積んでいる状況が確認されている。両壁の石を取り除いた掘り方は、幅165cm、深さ54cmを測る断面「凵」形で、硬質の砂層を掘り込んで形成されている。

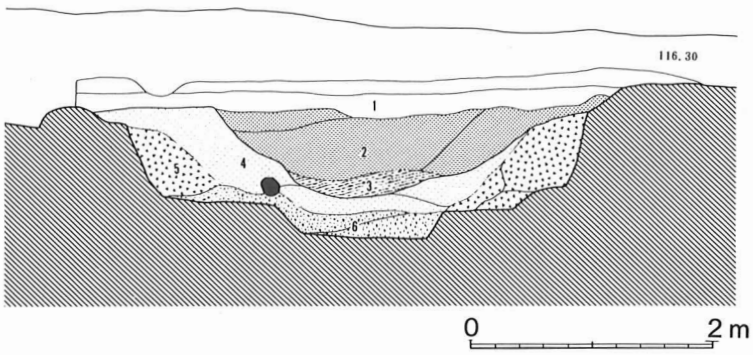
以上の遺構以外に、Ｂ～Ｄ－５グリットに比高差20cmを持って削平された土地の造成跡が認められる。この段より北側では、硬質の砂層が面的に認められるのに対して、南側は一面シルトに覆われており、その様相を大きく違えている。

第２次調査区については、すでに述べたので再述しないが、第１次調査区での遺構相互の関連をまとめると、それぞれの遺構の切れ合い関係や土層の状況より、少なくとも新古の２段階に分けて捉えられるようである。古い段階は、石組８、溝２、溝４が相当し、新しいものは、石組４～７、溝３が該当しよう。そして、いづれの段階も、遺構の構成や一面に覆われるシルトの状況より、水田の存在が想定されるものである。

２．中世～近世

溝１　（第８図）

調査区のほぼ全域に亘って確認された大型の溝で、最大幅600cm、深さ120cmを測る。全長39mに亘って延びる溝の平面形は、Ｂ・Ｃ－２・３グリットにおいて、それぞれ北側で孤を描きながら、南側のラインが直線的に南東方向に進み、Ｃ－４グリットで北側ラインが緩やかに東側ラインに移行し、直接、神社境内側になる南側のラインはほぼ直角に屈折して南下する。Ｃ－４・５・６グリットにおいては、ほぼ直線的な展開を示すが、特に境内側の西側のラインは、しっかりした直線が引かれる。そして、そのラインは、Ｂ－６グリットにおいて直角に屈折して境内の方向に大きく向きを変えている。反面、それに対面する東側のラインは、Ｃ－７グリット内で緩やかに方向を変え、遺跡の東側を南下する神田川に接続するかのように南東に大きく湾曲している。Ｂ・Ｃ－８、Ｃ－９グリットの西側ラインは、東側同様大きな孤を描き、530cmの幅を持って東側ラインと平行する。全体的に神社境内側の各ラインは直線を基調としているが、この部分より南側は緩やかな曲線を描き、様相を大きく違えている。このように、Ｂ－６グリット以北は、境内側の区画を意識しているようで、その外側の緩やかな湾曲とは平行しない。それに反して、南側は本来の溝の機能を重視した平面形を取っており、神田川の方向に水を流下させるように緩やかな曲線を描く。機能の面や形態から見てみると、Ｃ－７グリット内で認められる屈曲を境に、この溝は、２つに分けて捉えることが可能であろう。溝１は、多様な機能を持つものながら区画を意識した北側部分と、それから近接する河川とを結ぶ排水溝としての南側部分とからなる大型の濠の一部として捉えられる。



<土層>
1．暗褐色土　茶褐色土ブロックがやや目立つ。
2．黒 色 土　締まりのない砂質の層、小石の混入が目立つ。
3．黒 色 土　黒色の強い層で、植物遺体が極めて多い。
4．黒 色 土　粘土質の層で、φ２～３cmの小石が目立つ。
5．黒 色 土　粘土質の層で、砂がブロック状の塊で混入する。
6．黒 色 土　砂質の層で、締まりは強い。小石が目立つ。

第５図　溝１土層図（第１次調査区北壁）

北側の区画をさらに詳しく見てみると、調査区西壁際で、区画する溝の北端が現在の神社社殿の方向に向きを変えているのが分かる。調査範囲が限定されており、不確実な部分が多いものの、この部分にも溝が屈折する変換点が存在するようである。このように、溝の内側は、方形区画を志向した溝による土地の区画が認められるが、この西壁際の屈折を考慮すると今回の調査範囲には、方形区画の南東隅に付随する方形の張り出し部の存在が想定される。そして、それは、幅600cm、長さ1300cm程度の規模を有するようである。

この張り出し状の方形区画が確認されたことにより、現在の神社境内に、溝により区画された居館あるいは現在の神社域とは区画を違えた神社などの存在を想定しなければならないが、今回の調査区内には、それが確認されるだけの建物跡などは認められていない。

遺構が掘削されている基盤が砂質あるいは粘土質であるため、溝１構築当時の状況を示している部分は少ない。断面は、南下する部分が最も残りが良く、両壁とも安定しており本来の形を残す。Ｃ－４グリット内での断面形を第５図に示したが、幅450cm、深さ120cmの規模を持つ箱型の断面であることが分かる。なお、溝の底部中央に幅140cm、深さ20cmに亘って溝状の落ち込みが見られるが、流下する水の浸食によって作られたもので、その中は小石混じりの砂に覆われている。この浸食部分は、このＣ－４グリット部分から北側の溝底部に不規則に蛇行する状況で認められ、各所で壁がオーバーハングしていたり、樹根状に溝が枝分かれしている。

断面形は、溝全体で箱型を基調としているが、各地点での規模を見ると、Ｂ・Ｃ－３グリットで遺構確認面において幅580cm、深さ70cm、Ｃ－８グリットで幅530cm、深さ70cmを測る。Ｃ－４グリットでの数値も踏まえると、それぞれが均一の大きさを示さないことが分かる。また、規模を計測した各地点で、溝底面の標高を見てみると、北側より114.9m、114.7m、114.4mをそれぞれ測り、南に向かって低くなっており、溝中の水が普遍的に流水となっていたことが分かる。

この溝１が埋没した状況を検討してみると、先に述べた最下層が砂層（第６層）で覆われ、その両脇の壁際に、三角堆積（第５層）が認められる。ここの堆積物には、砂質ブロックの混入が顕著に認められ、溝の壁の崩落によるものであることが良く分かる。

第５層、第６層の上には、自然堆積と思われる粘土層の第４層があり、それを挟んで溝の中層には、層厚20cmを測り、植物遺体が多く含まれる特徴的な第３層が認められる。

そして、この層の上には、層厚70cmを測る第２層が堆積している。この層は、小石を多く含

む締まりの弱い層で、人為的に埋められた堆積状況を示している。後述する遺物の大半は、この層からの出土で、やや偏在した状況で検出されている。このように、溝の覆土は第３層を境に上下に分層され、植物遺体層の存在から、ある時期には第３層下を溝の底面として機能していた時期があったことが分かる。そして、この溝は、ある段階を以て一気に埋め戻され、廃絶されたようである。

排水溝としての機能を重視している溝１の南側では、溝の中央に石組みの堰が確認されている（第９図)。これは、その南東側が調査区域外に延びているため、全体の様相は分からないが、検出されている部分は、長さ600cm程度を測り、ほぼ溝の壁に平行する状態で、線状に配列している。石組みは、２，３段の石積みとして高さ70cm程度を測るものとして認識され、その面を北側に向けている。石積みの石は、30～50cm四方で、控え30cmほどの四角形のものが多い。線状の配列や不安定な石積みである点から、裏込めが必要であると思われるが、石組みの位置から考えると、溝がある程度埋没した段階に再度溝を掘削し、壁材としてこの石組みが構築されたと考えられ、その段階に裏込めもほどこされたものと思われる。そうすると、この溝１の新しい段階には、最も流水の影響を受ける溝南壁に石積みが施されていたものと考えられ、調査区東壁際で幅150cmを測る溝として機能していたものと捉えられる。このように、溝の壁としてこの石組みを捉えると、厳密にこれを堰の名称で呼ぶのは不適当であろう。また、この新しい段階は、前述した溝覆土の観察から得られた溝を新古の２段階に分ける状況にも対応する可能性が高く、溝を方形に区画して居館などを造営している間に、最低でも１回は溝の改修が行われた状況が浮かび上がってくる。

この溝１の堰の対面には、丸太杭による堰状の施設が確認されている。これは、溝１の南端、調査区の東壁に位置しており、テラス状の平坦面と２本の丸太杭によって構築されている部分が検出されている。検出部分がほんの一部であるため、全体の形態や杭とテラスとの関連などその構造上の特徴などは分からないが、前述のように神田川側への排水機能を重視した部分に設置されている点は、対面の石組みとともに流水のスムーズな流れを確保するための施設と言える。検出している部分の構造は、溝の底面から高さ55cmを測り、幅125cm、長さ35cmに亘って確認されたテラスとその根に設置された径25cmほどの丸太による堰状の施設からなる。丸太杭の堰は縦杭と横杭で作られ、溝の護岸の要素も強く保持しているようで、溝の壁に密着して確認されている。

井　戸　（第９図）

第１次調査の北壁際で検出された井戸は、(125cm)×80cmを測る方形の平面形で、深さ122cmを測る掘り方に、桶状の井戸枠を設置している。この遺構は、調査中に、軟弱な調査区の壁の崩落に見舞われ、遺構に関する詳細なデータを取ることが出来なかった。第９図に掲載した実測図は、その概略を示した程度のものにすぎない。井戸枠は、径48cmを測り、周囲を小石を含む砂の層で固定し、粒子の粗い砂層の上面に設置されている。井戸枠の上は、拳大～人頭大の石が、北東側から投げ込まれた状態で一面が覆われている。これは、井戸を廃棄する際、人為的に行われた石などの投げ込みによるものであり、石以外にも井戸の覆土第１層～第３層が、人手による埋め土として認識されるものである。この井戸からは、その井戸枠内から植物遺体の目立つ第６層とともに第20図－190の漆器が出土している。

３．遺物と出土状況

この項では、中世～近世に比定される溝１の遺物について解説する。

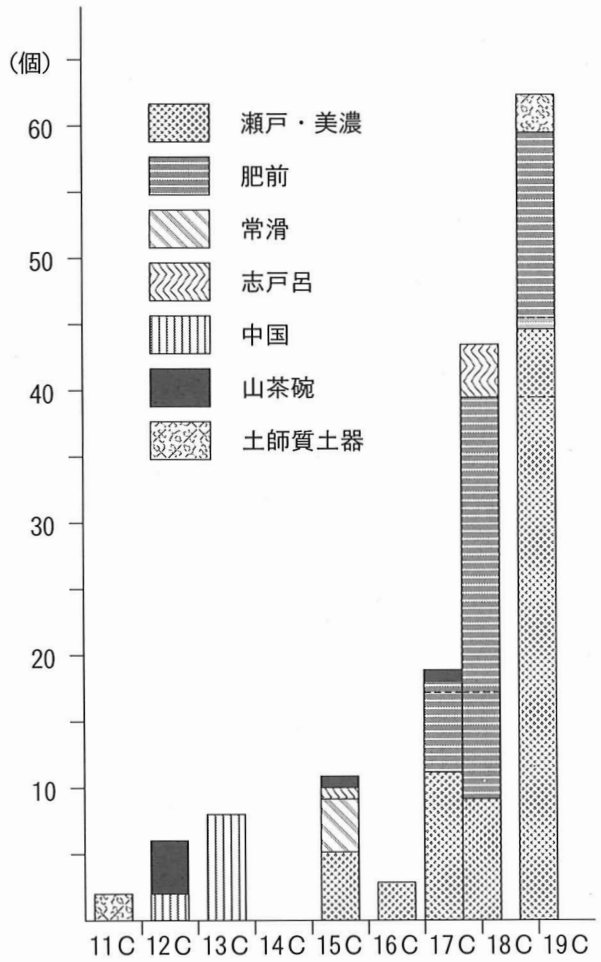
溝１は、幅400～600cm、深さ120cmを測る大型の濠で、数多くの遺物の出土が認められる（第10～20図）。遺物は陶磁器を中心に、漆器などの木製品や砥石などの石製品などが、ほぼ溝１全域から出土している。特に、陶磁器の量は圧倒的に多い。第２表は、基本的に実測図を掲載したものの内、年代と産地の明らかなものの一覧を表にしたものである。土器を含め器となる資料は、表土中で検出された弥生時代～古墳時代前期の壺の底部（第17図－132)を最も古いものとして、第17図－133～135（溝１覆土中出土)、第18図－181（表土中出土）の古墳時代後期に比定されると思われる須恵器の甕の破片なども認められ、遺跡として時代的に複合している状況が把握されるが、直接溝に関係する資料としては、1100年前後の土師質土器（かわらけ）と山茶碗が最も古いものと思われる。以後、19世紀半ばまで途中空白期間を経ながらも、徐々にその量を増やしているようである。ただ、各陶磁器の年代は、生産された年代、買入、使用された年代、伝世した年代、廃棄された年代が、陶磁器の形式が多岐に亘るだけに、各形式の用途によって、その期間的なばらつきが著しい。そのため、本遺跡のような陶磁器の消費地においては、生産地の年代をそれぞれの陶磁器の出土状況が適格に表すわけではない。しかし、国産陶磁器については、生産年代と買入年代はそれほどの差がないものとみなし、陶磁器を購入した状況をその生産年代から考える資料として第２表～第４表を作成してみた。それによると、12世紀前後の在来系の山茶碗、土師質土器の出現以後、15世紀にやや目立った出土量を示すようになる。この段階の資料は、瀬戸・美濃と常滑産の占める割合が多く、それぞれ45％と36％の値を示し、15世紀段階の約80％はこれらの産地のもので占められる。ただ、量的にはそれほど多くなく、全体の７％に過ぎない。

さらに、この溝１出土の陶磁器の大きな特徴として、16世紀代に比定される資料の量が極めて少量であり、江戸時代に入るとそれに反発するかの如く、その量を増やす点が上げられる。16世紀のものは、全体の２％に満たないが、その具体的な理由については分からない。ただ、溝が造営されている間の一つの大きな画期として認識され、それに区画された内部の施設に何らかの変化が生じた可能性を指摘できそうである。

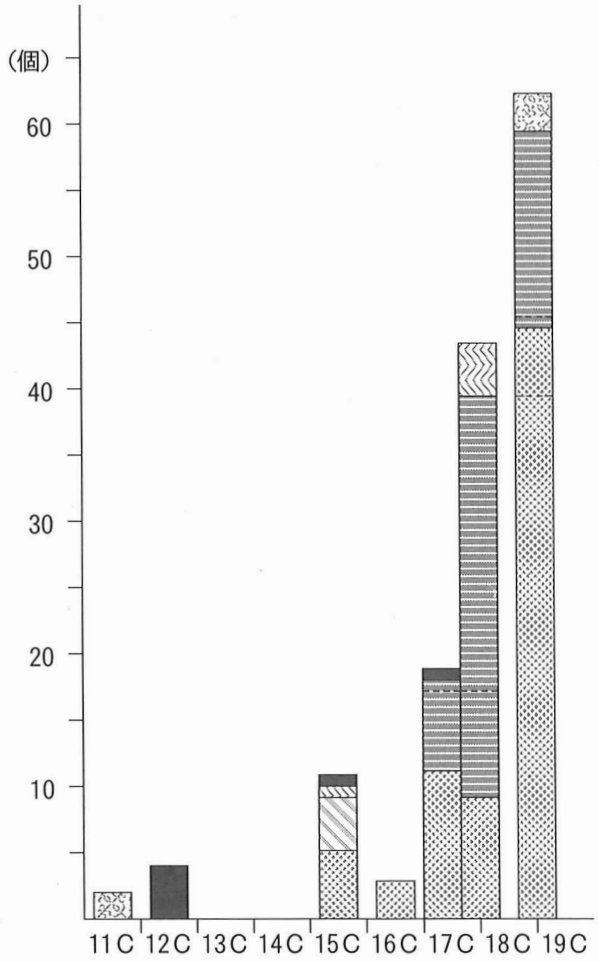
17世紀以降は漸移的にその量が増え、17世紀前半のものが全体の12％、17世紀後半～18世紀前半が28％、18世紀後半～19世紀前半が40％をそれぞれ占める。この段階の陶磁器の構成は、瀬戸・美濃と肥前産のものがその大半を占めているが、その構成比は大きな変化を示す。17世紀後半～18世紀前半では、瀬戸・美濃が40％、肥前が70％の構成比を示すのに対して、18世紀後半～19世紀前半では、瀬戸・美濃が71％、肥前が23％を示し、その比率は逆転する。そして、この変化に呼応するかのごとく、18世紀前半までのものには、第10図－12,13の白天目（瀬戸・美濃）や肥前京焼系の皿である第14図－68、漆継ぎが見られる肥前の絵皿である第14図－73,74などの高級品が一定の比率を示すのに対して、18世紀後半以降は椀や皿などの日常什器がその大半を占めている。また、18世紀後半～19世紀前半段階には、第11図－40～45の瀬戸・美濃の灯明皿が顕在化し、その量を増やしたり、17世紀後半～18世紀前半の第15図－79の染付け（肥前）から18世紀後半以降の瀬戸・美濃の第11図－29～33へと仏飯器が転換したりしている。これらの変化は、18世紀の中頃を境に陶磁器の器種構成比率が、大きく変化したことを表していると考えられる。この型式的な変化は、それらの使用目的や使用した人々の変化を如実に反映するものであるが、神社という特殊性から、その信仰形態の変化が窺われるものである。

第２表　　溝１　出土遺物の時代別構成表

種別＼年代		11C後半	12C	13C	14C	15C	16C	17C前半	17C後半～18C前半	18C後半～19C前半	合計
土師質土器		2								3	5
山茶碗			4			1					5
陶器	瀬戸・美濃					5	3	11	9	40	68
	肥前							6	8	1	15
	常滑					4					4
	志戸呂					1			4		5
磁器	瀬戸・美濃									5	5
	肥前							1	23	14	38
	中国							1			1
青磁（中国）				8							8
白磁（中国）			2								2
合計		2	6	8	0	11	3	19	44	63	156



第３表　溝１　出土遺物の時代別推移１



第４表　溝１　出土遺物の時代別推移２
（第３表から中国磁器を除く）

以上が溝１から出土している陶磁器の各時代別出土数の推移であるが、それをグラフ化したものが第３表である。さらに、現在、浅間大社が所蔵している竜泉窯系の青磁類（県指定有形文化財）からも分かるように、極めてその伝世期間が長い中国磁器を除いたのが第４表である。陶磁器の時代別変遷がより明確になっている。

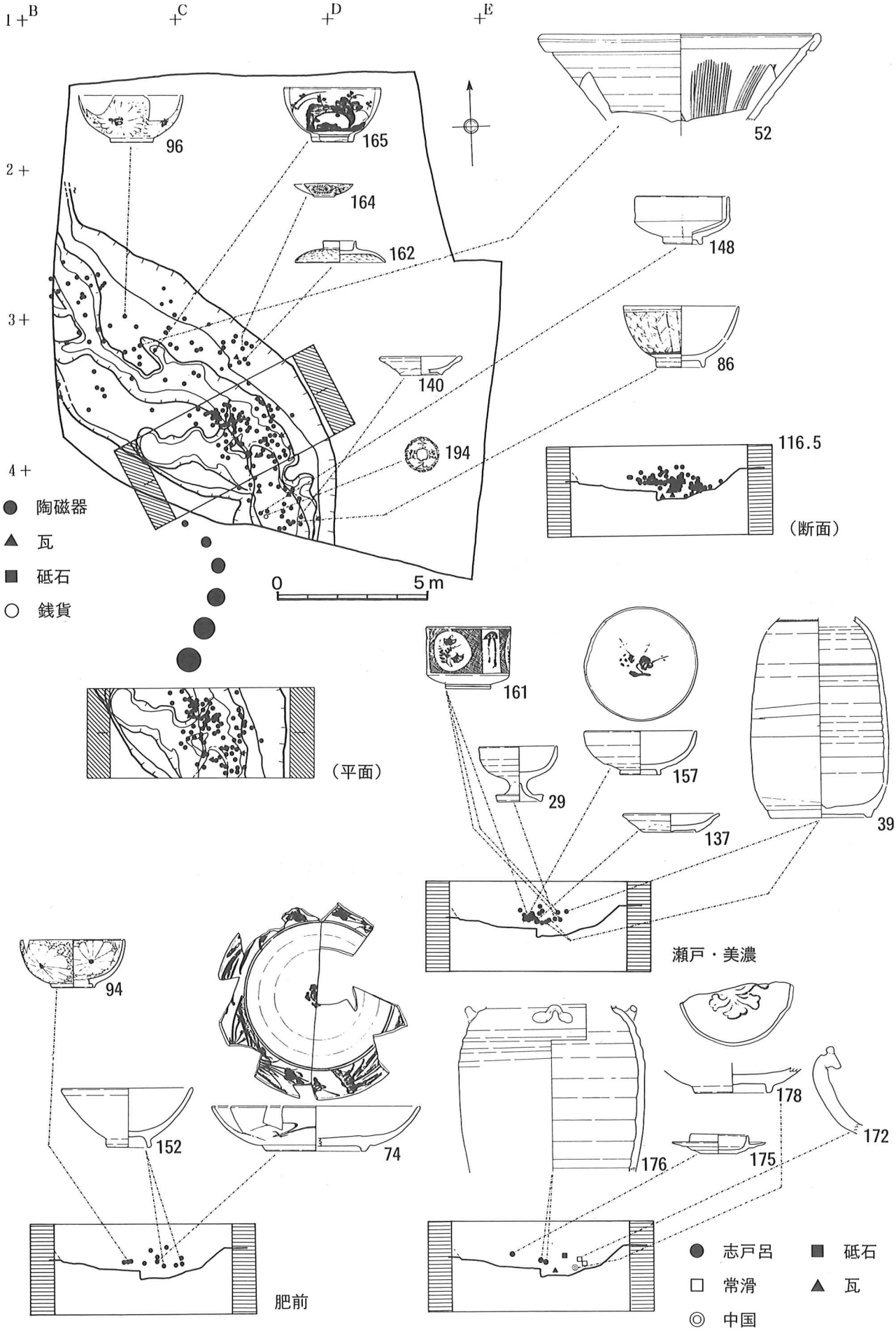
次に、これらの陶磁器を主とした遺物が、どのような出土状況を示しているか、ここで、少し解説をしてみる。

溝１からの詳細な遺物の出土状況は、調査時間の都合で第２次調査分のみ、その取り上げのデータを記録している。第６図は、第２次調査区における溝１の遺物出土状況を表した図である。平面的な遺物の分布は、石組１、石組２、石組３を敷設する際の削平の影響を受け、これらの石組みと重複する溝の北側での分布が疎らで、影響を受けない南側で密集している。遺物の出土が多い溝の南側での遺物の分布は、溝の中央が多いのに対してその両側は少なくなっており、その分布に偏りを示している。

これらの遺物の垂直的な分布を見てみると、第６図の断面図から分かるように、溝の底面から厚さ25cmの間層を挟んで、溝の中間に遺物の集中的な分布域がある。そして、これは、その平面分布でも述べたように、溝の中央にその区域が偏在している様子を窺うことができるものであり、その分布に何らかの規制が働いていることをよく表している。

実測を実施した地点は違うが、この垂直分布と第５図の溝１の土層図とを重ね合わせると、溝覆土の第２層、第３層部分と遺物の分布域とがほぼ一致していることが分かる。これは、前述のように溝１がある時期に改修され、その改修された溝に遺物が限定的に廃棄されたためであり、遺構と遺物の出土状況とが相関した関係を持った結果と解されるものである。

出土遺物の内、陶磁器はその産地や形式によって分布が偏ることなく、全域に亘って散らばって出土している。断面図を作成した箇所の個々の資料について少し見てみる（第６図）と、瀬戸・美濃、肥前、共に遺物の集中部分に含まれ、その下位に明瞭な溝底部との間層の存在が窺われるものとなっている。そして、瀬戸・美濃産の内、図示した29の仏飯器が18世紀後半～19世紀、39の徳利と157の梅文皿及び磁器の筒型碗である161が19世紀、137の志野の皿が17世紀代の生産年代がそれぞれ与えられ、肥前では、74の皿が17世紀後半～18世紀前半、94の碗が18世紀後半、152の唐津系の碗が17世紀に比定されるが、各々は生産年代の新古に関わらず、ほぼ同一の層位から出土している状況を示している。さらに、175の志戸呂の灯明皿が18世紀前半のもので、産地は違えるが、同じ遺物集中域から出土している。生産年代が大きく異なる各陶磁器が、同一の地点から出土するのは、それぞれの使用期間や伝世期間に大きな差があるものの、廃棄された段階にはそれほど時間差が認められないことを意味しており、さらに、その廃棄は、溝１から出土している陶磁器の中で最も新しい段階である19世紀中頃に行われた理解されるのである。そして、陶磁器がこのように一括して廃棄されたため、その生産年代別の出土量が急に増える段階が認められるとともに、それが17世紀以降に生産されたものに限定できるようである。



第６図　　溝１（第２次調査区）遺物出土状況図

Ⅴ．まとめ

今回は、富士宮市でも旧来の町並みが残り、古くから市街地化が進む地域における発掘調査であった。過去、調査件数が少ない地域でもあったため、その成果は大きなものであった。加えて、沖積地を対象としたことも、山間地に位置する富士宮市の歴史を探る上で、考古学的に新たな知見が得られた。

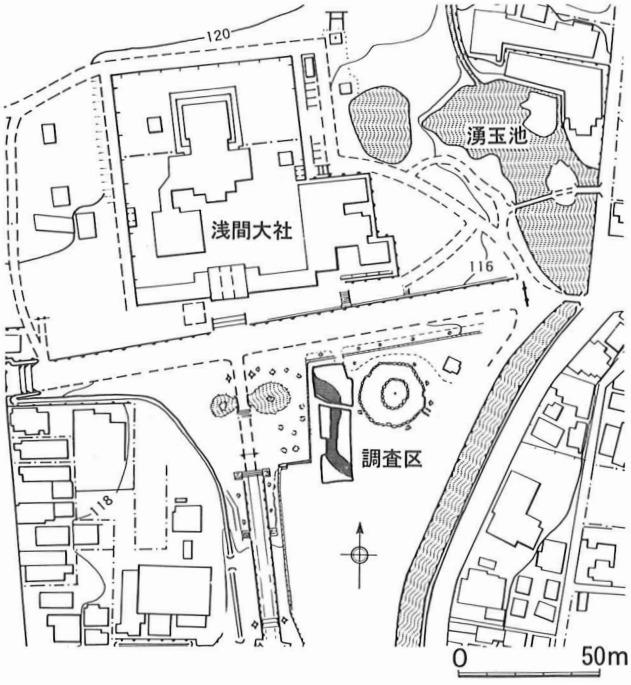
１．遺構について

今回の調査で検出された遺構により、平安時代の終り頃からその造営が開始され、現代まで脈々と土地の開発が施行されたことが窺われたが、中世から近世にかけては、大型の溝である溝１と井戸が発見され、近代以降は道と思われる石組や畦畔、水路などが検出された。このように、その形を変えながらも、時代に呼応した土地利用が実施された様子を垣間見る事ができる。そして、その状況には大きな転換期が認められる。

近代～現代は、調査区の北側で、神社に関連すると思われる対面する石組が検出され、その南側で、作り替えが認められる水田跡や排水機能を持った水路の敷設などが認められており、湿地帯を含むこの区域での積極的な土地開発の跡が発見されている。それに反して、中世～近世では、長期間に亘って造営された溝とその外側に井戸が設置されているに過ぎない。これは、この地区がこの間、同一の目的で使用されていた事を意味しており、そこが不可侵な部分として、確固たる神社域の形成に関与していた事を物語っている。そして、明治の初頭を境に、神社域の意識自体に大きな変革が生じ、その神社域を区画する溝部分まで、民衆レベルの開発が行われるようになったようである。

第７図に示したように確認された濠（溝１）は、現在の浅間大社の社殿や築地塀、参道などの方向、または、馬場などの向きのいづれとも、その方向を違えている。神社は、概ね南面しているものの、厳密な方位を言及すると、この濠の南北ラインの方が、それをより重視した配置を示している。この濠を伴う区域と現在の神社域とは、このように大きく様相を違えており、今回の調査成果によれば、この区画の改変を伴う神社の改修が明治時代初頭に施行されたものと捉えられるのである。そして、その状況は、濠がその覆土中に近世陶磁器を多く内包しながら廃絶されて、その上に現在の馬場と平行する道（石組１・石組２）が敷設されたことで、適格に表されている。

この濠の発見は、今回の調査の最大の成果と言えるが、その造営期間とともにその形態は注目される。濠の内側のラインには、直線と２ヶ所の屈折部分が認められ、そこが方形を志向していることが分かる。



第７図　現在の浅間大社と調査区

方形区画は、在地領主の居館としての「方形館」の存在が想定されるが、今回の調査範囲だけでは、全体の溝の展開や内部の構造など、その具体的な内容は分からず、可能性の域を脱し得ない。また、現状が神社であるという特殊性も加味され、この方形区画が神社自体の造営の問題にも関わるものであるが、浅間大社の創建時の状況は、解明されていない部分が多く、濠が掘削された段階とどのように相関するのか良く分からない。方形区画の開始が方形居館を規定するのか、神社域を規定するのか、あるいは寺域を規定するのか、中世の方形居館の出現の問題（中井 1991)も踏まえて、その解明は今後の大きな課題である。

浅間大社遺跡と神田川を挟んで隣接する大宮城跡では、近年の調査で、古墳時代後期に集落が形成された後、浅間大社遺跡同様、11世紀後半になるまで建物などを築く土地の利用が行われなかったことが確認されている（富士宮市教育委員会 1986)。このように、浅間大社遺跡や大宮城の周辺は、11世紀～12世紀にかけて、突如として土地開発が行われたようで、そこには、今回の調査で確認された濠から想定される区画や大宮神田曲輪などの方形区画を伴う建物群に代表された極めて計画性の強い開発を強いる政治力の存在が窺われるのである。

2．遺物について

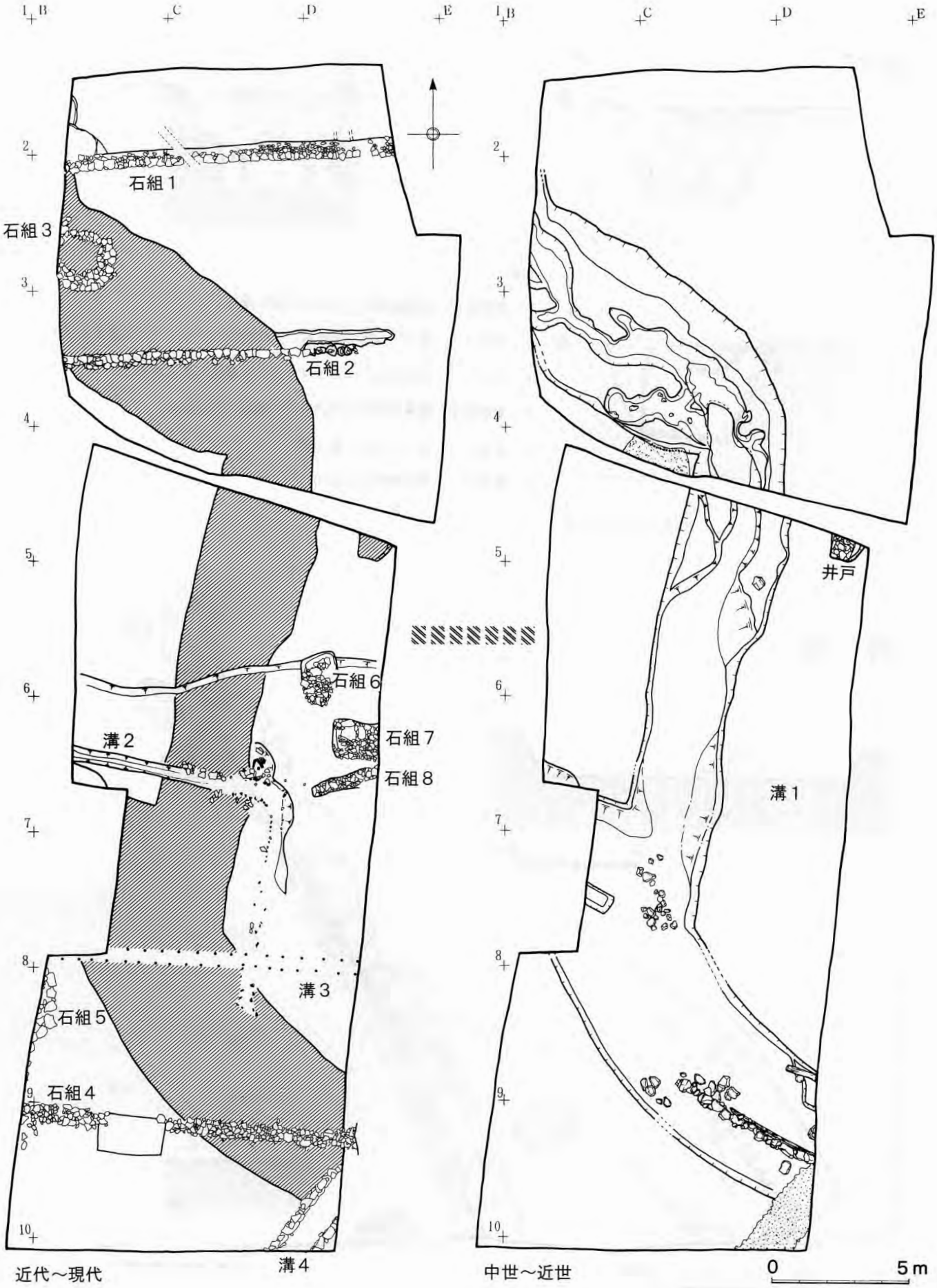
今回の調査では、富士地区でかつて見られなかった良好な近世陶磁器の出土があり、考古学的に本地域の近世史を探る上で、大きな成果が得られた。出土している17世紀以後の陶磁器の動向は、江戸を中心とする関東に肥前系の陶磁器が多量に供給されようになる段階（大橋 1988)に対応してその量を増やし、１９世紀以後、瀬戸・美濃系が磁器の生産を開始するなどの技術革新を経て、大きく陶磁器の消費市場でのシェアを延ばすようになる（佐々木 1987)と、それに連動するように、出土陶磁器の構成比率が大きく変わり、瀬戸・美濃系の占める割合が飛躍的に大きくなる。

この陶磁器市場の動向は、主な消費地に共通する現象であるが、今回の出土陶磁器が、神社からの出土である点は、消費する側の神社の状況を十分踏まえなければならない。

18世紀後半以降は、富士講の流行により富士山への登山者が急激に増える時代で、神社に参詣する人の数が多かった時代である（遠藤 1971)。この民衆信仰としての富士講の流行により浅間大社側も多くの登山者を迎え入れていた。１９世紀以後、陶磁器市場で大きなシェアを誇っていた瀬戸・美濃系の陶磁器を積極的に需要するようになったのは、流行した富士講に対して各種陶磁器を必要とした神社側の社会環境の変化が大きく作用していたのであろう。

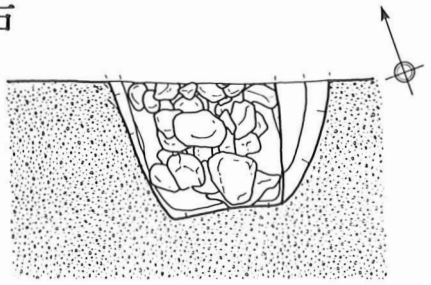
文　献

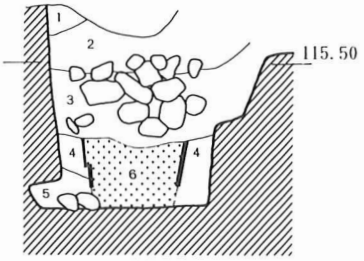
中井　均 1991 「中世の居館・寺そして村落」『中世の城と考古学』新人物往来社
富士宮市教育委員会 1986 『大宮神田曲輪跡発掘調査概報』
大橋康二 1988 「伊万里磁器研究の現状」『月刊考古学ジャーナルNo.297』
佐々木達夫 1987 「江戸へ流通した陶磁器とその背景」『国立歴史民俗博物館研究報告第14集』
遠藤秀男 1971 「第八章　富士講と富士登山」『富士宮市史上巻』富士宮市

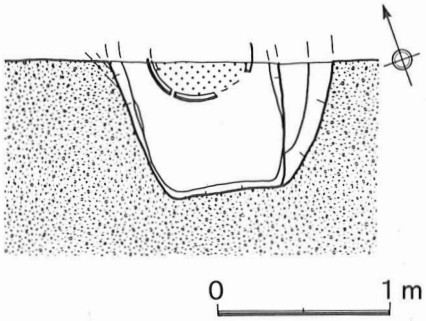


第8図　遺構全体図

井戸







土層

1．灰褐色土　灰褐色粘土がブロック状に混入。

2．黒色土　締まりが強い粘土層、灰褐色粘土ブロックが少量見られる。

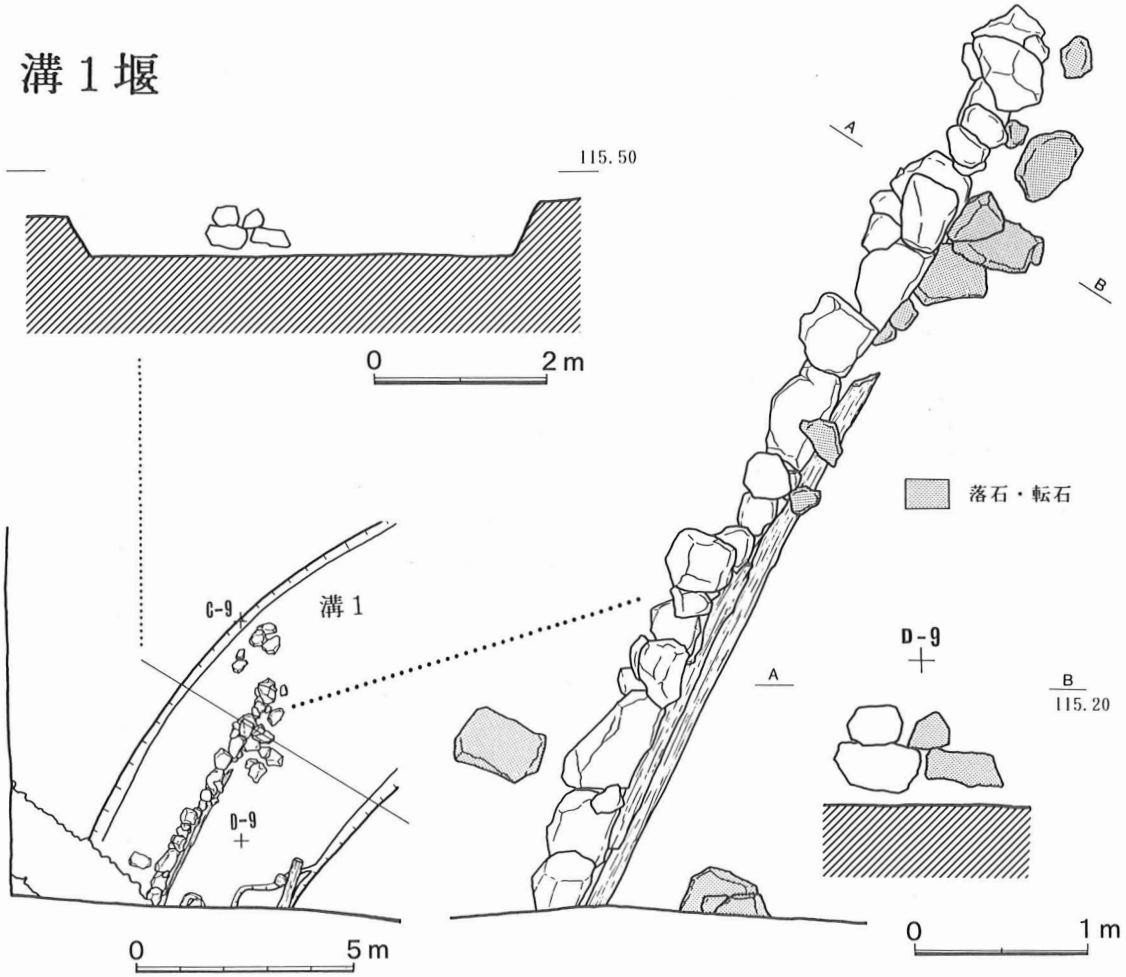
3．黒色土　灰褐色粘土ブロックの混入が顕著に見られる。

4．黄褐色土　砂質の層で小石の混入が顕著に見られる。

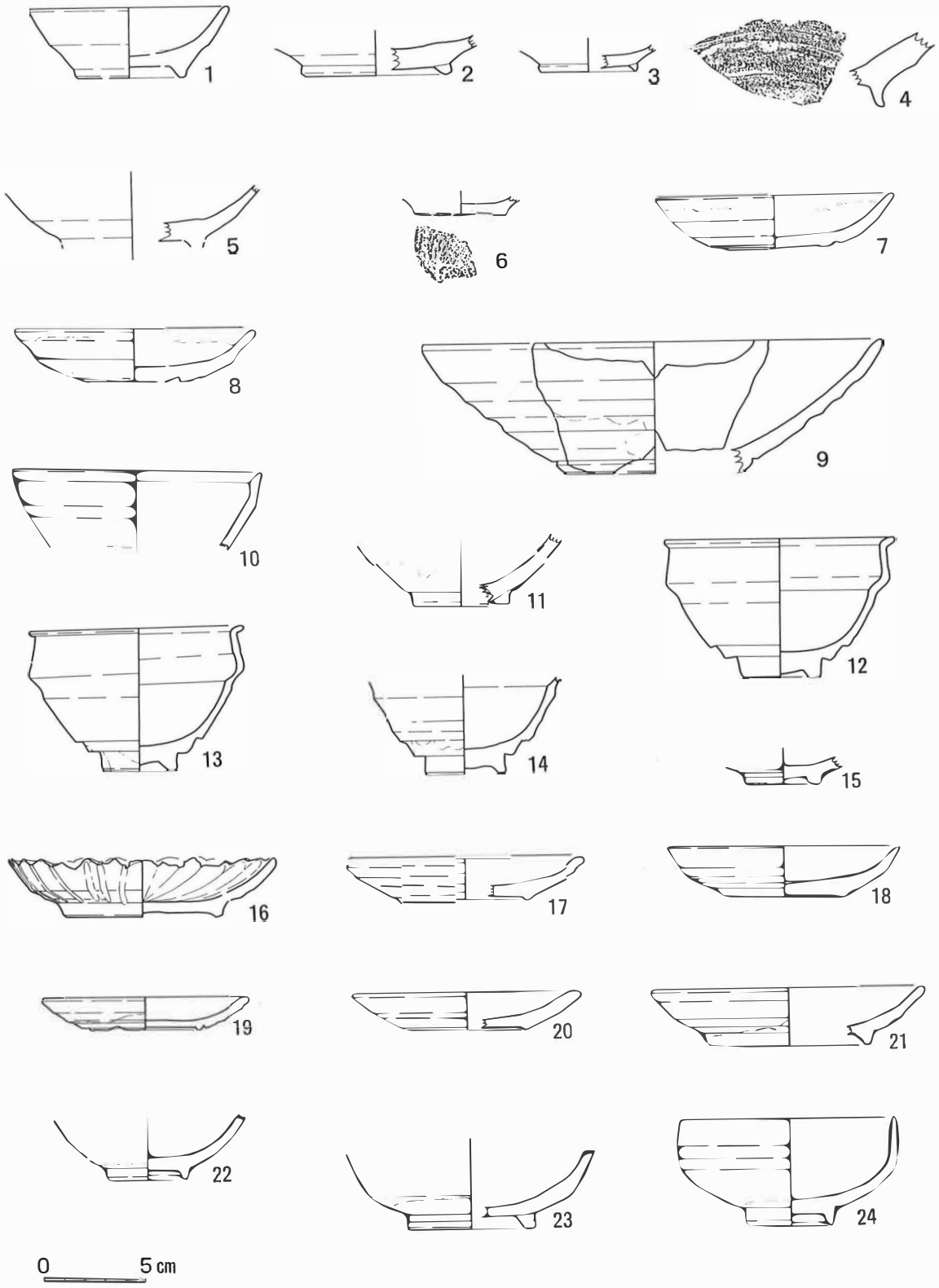
5．黒色土　粒子の細かい砂の層。

6．黒色土　植物遺体が目立つ。

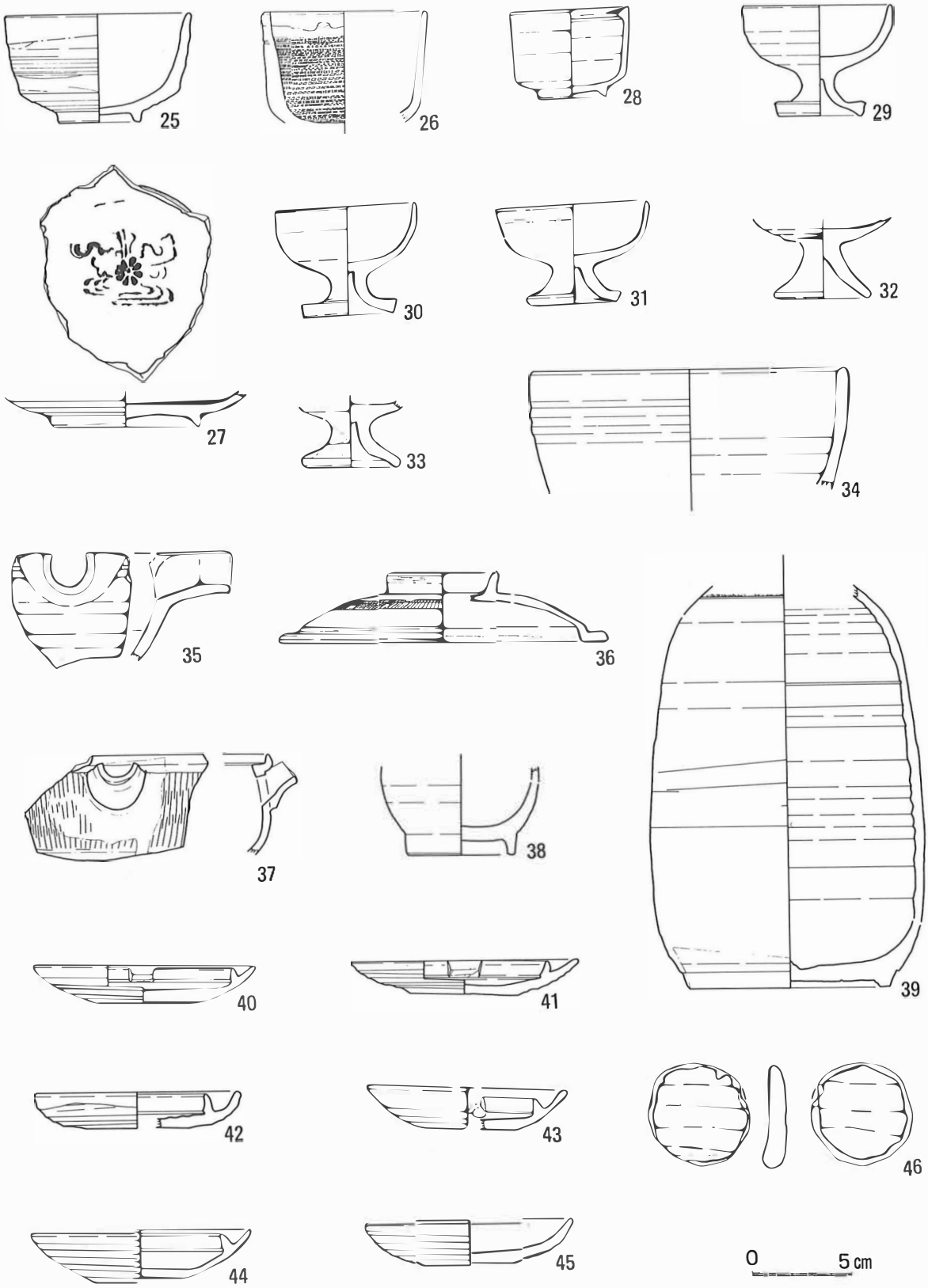
溝１堰



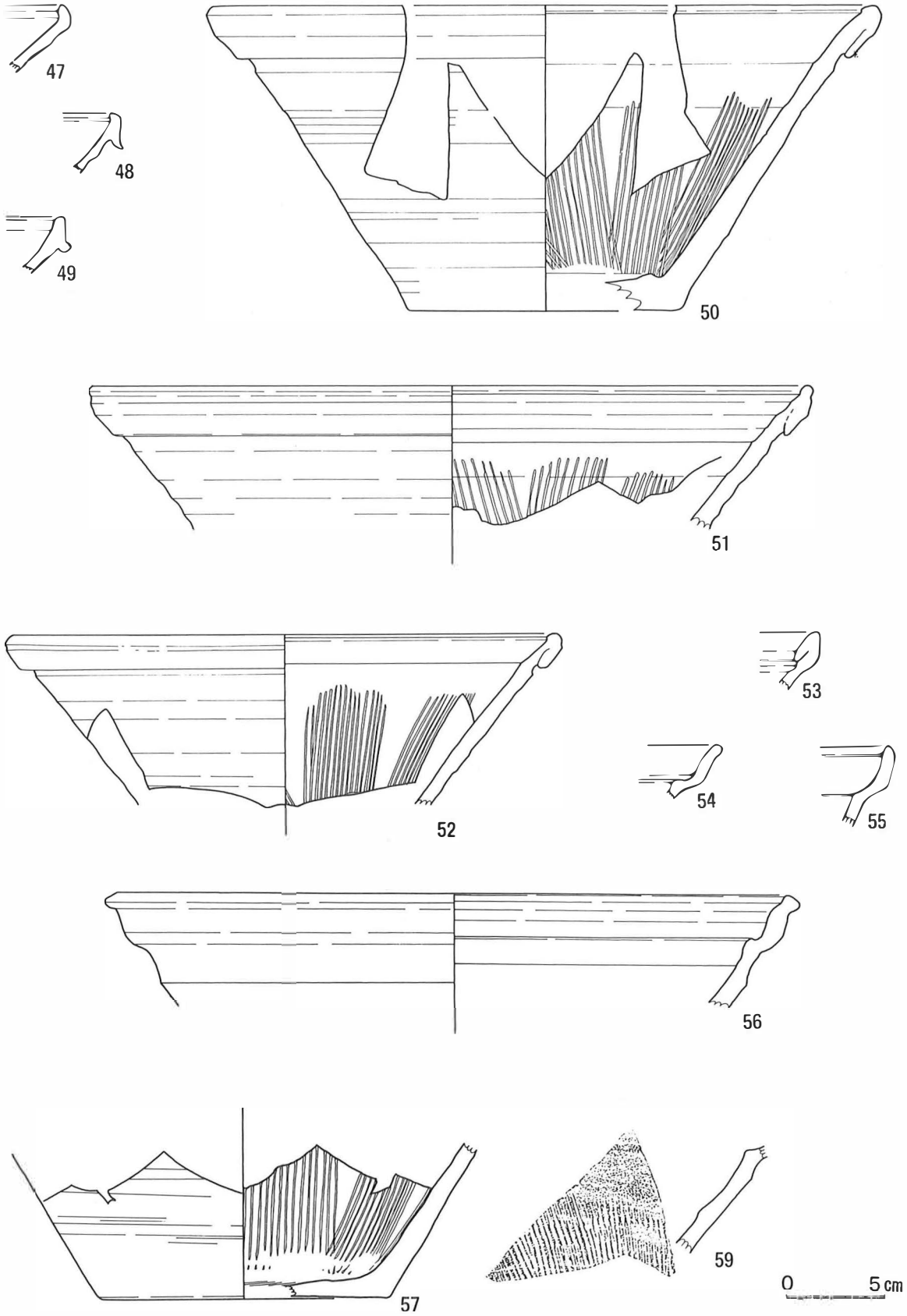
第９図　　遺構実測図（井戸・溝１堰）



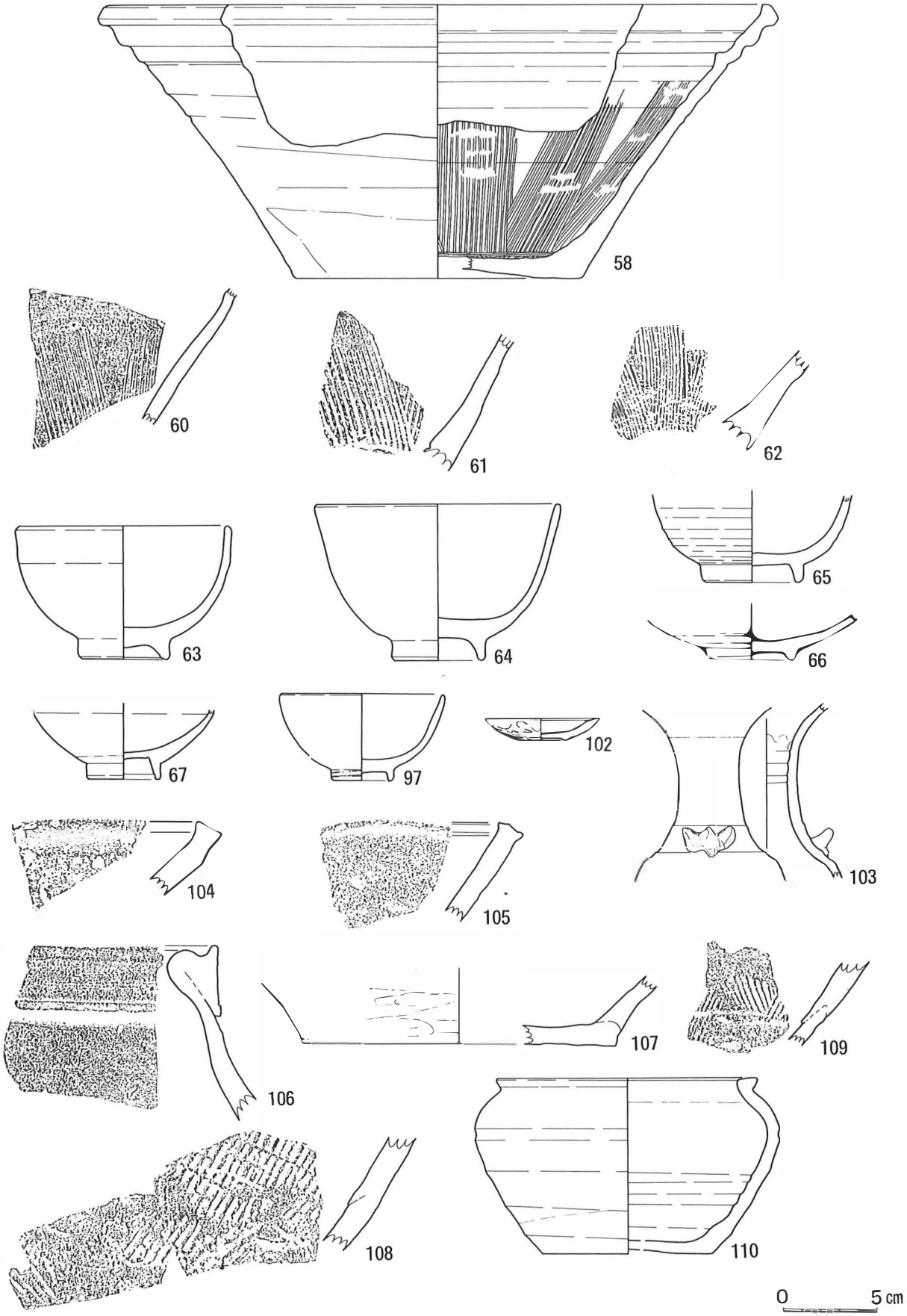
第10図　　出土遺物実測図１



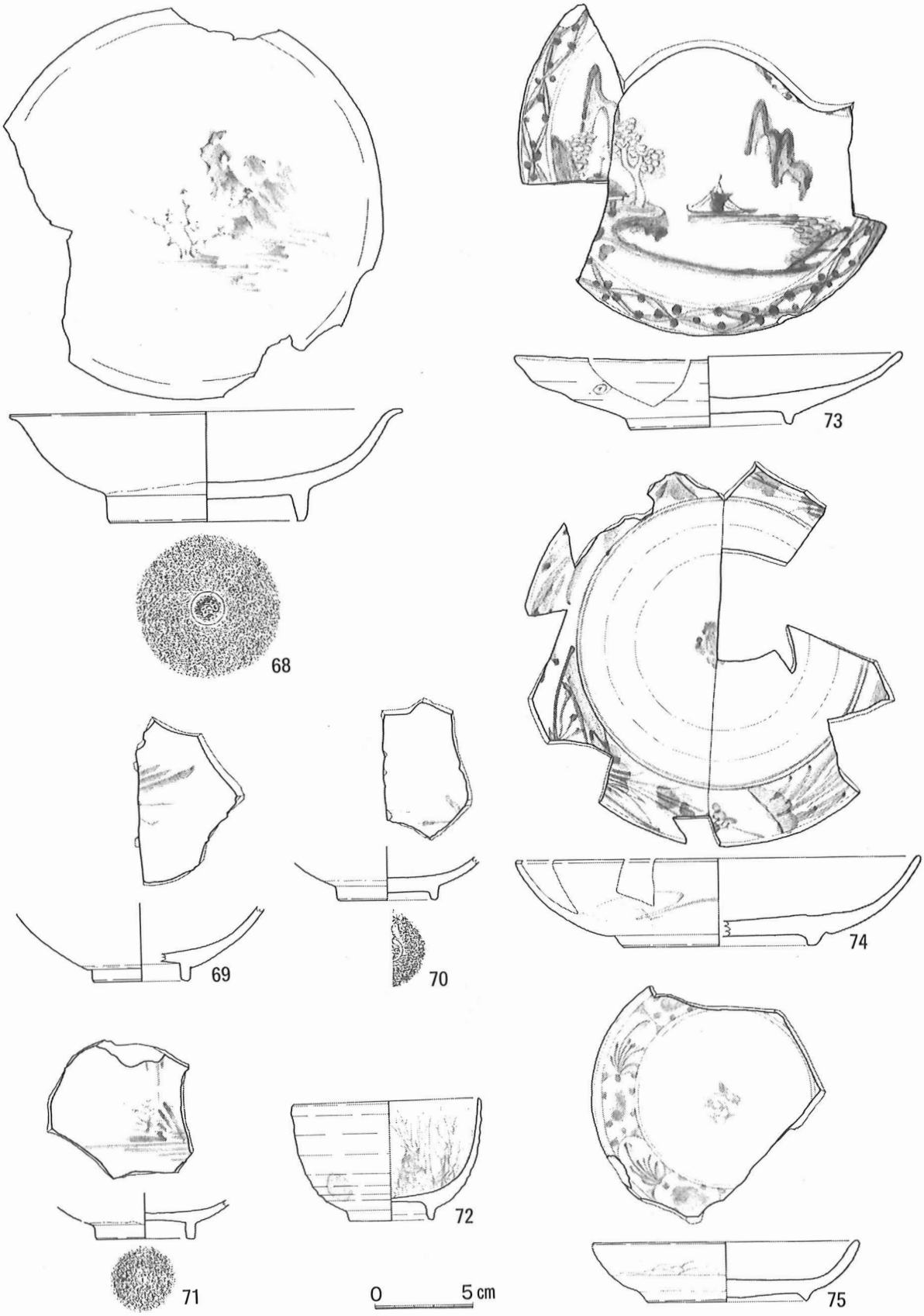
第11図　　出土遺物実測図２



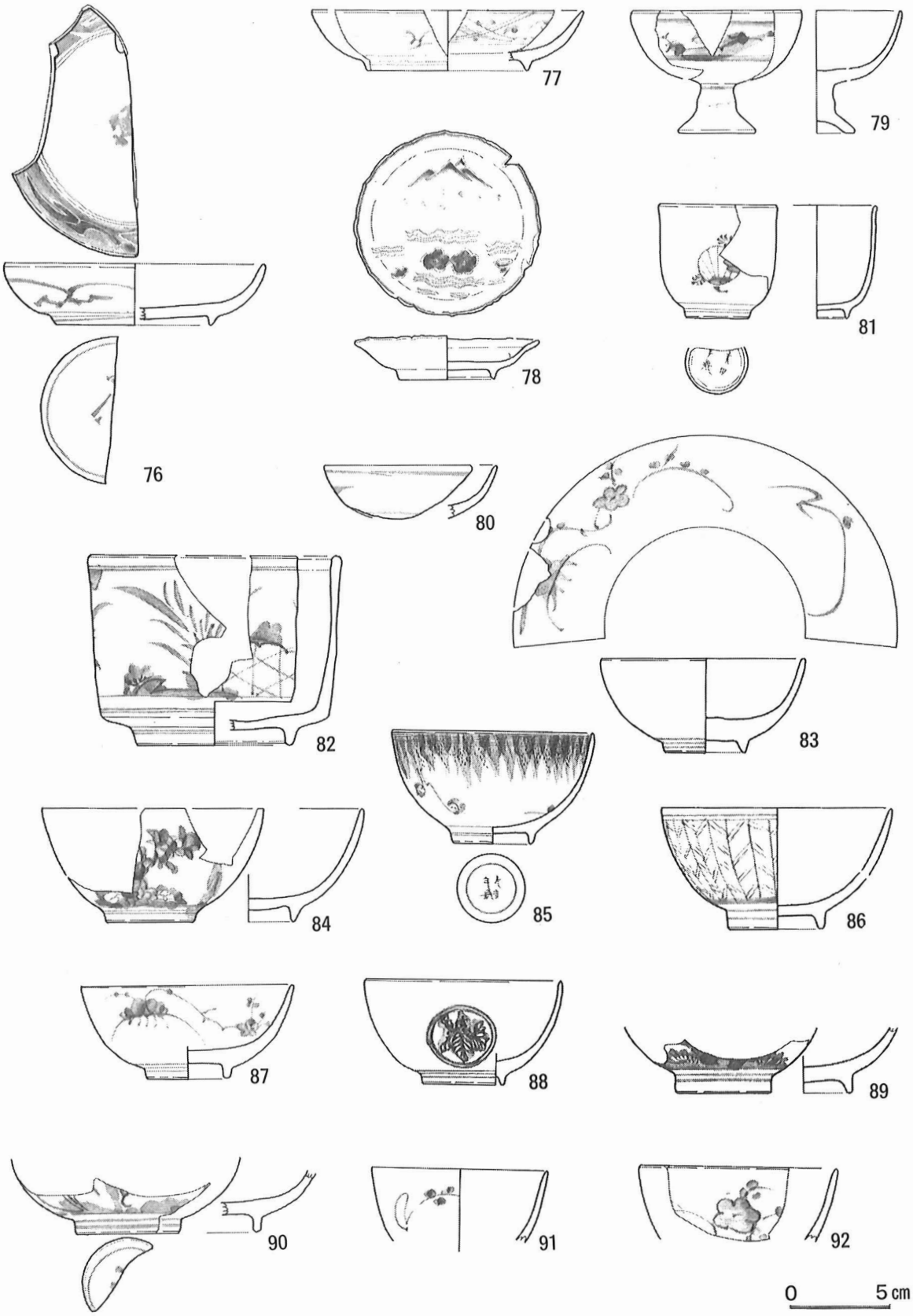
第12図　　出土遺物実測図３



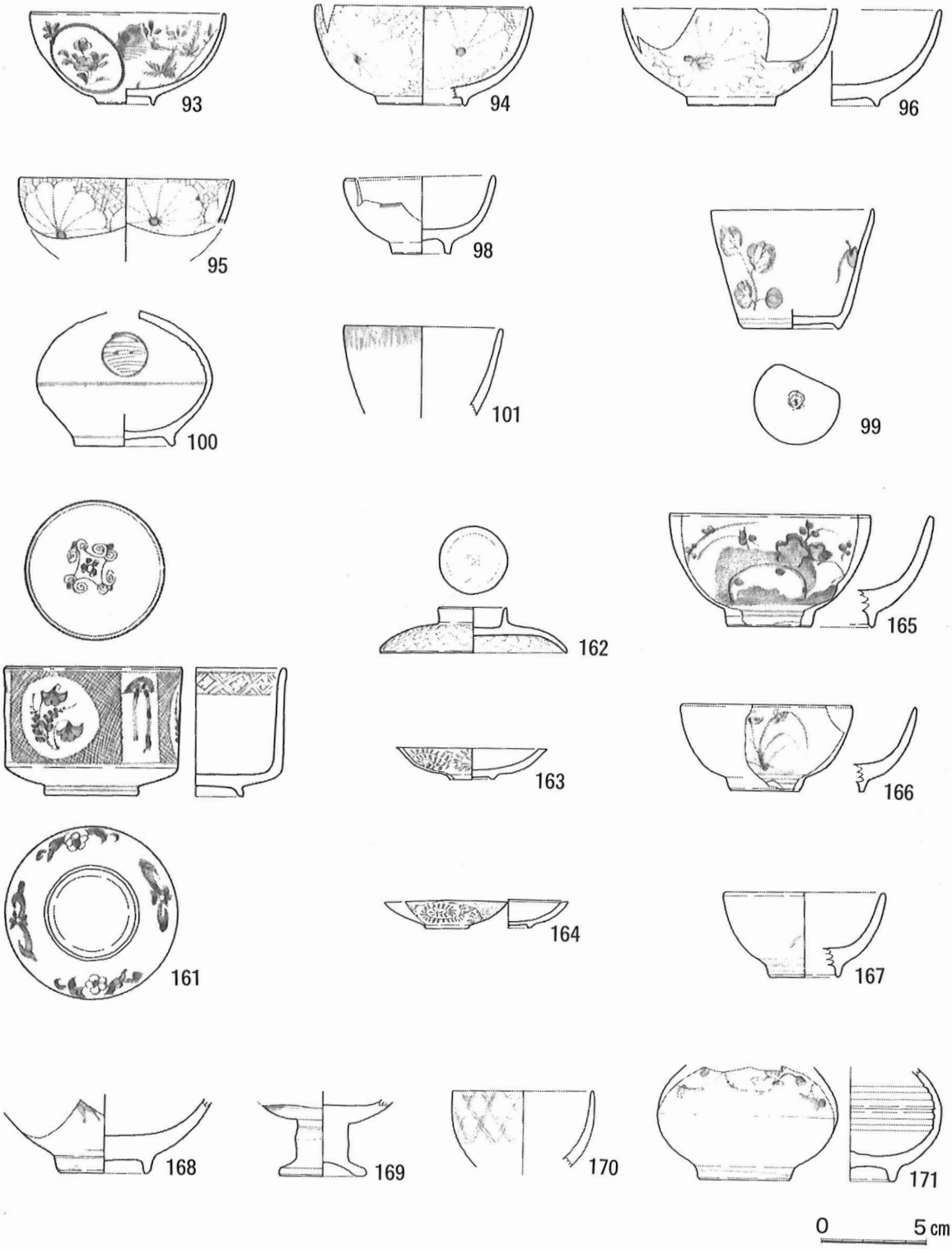
第13図　　出土遺物実測図４



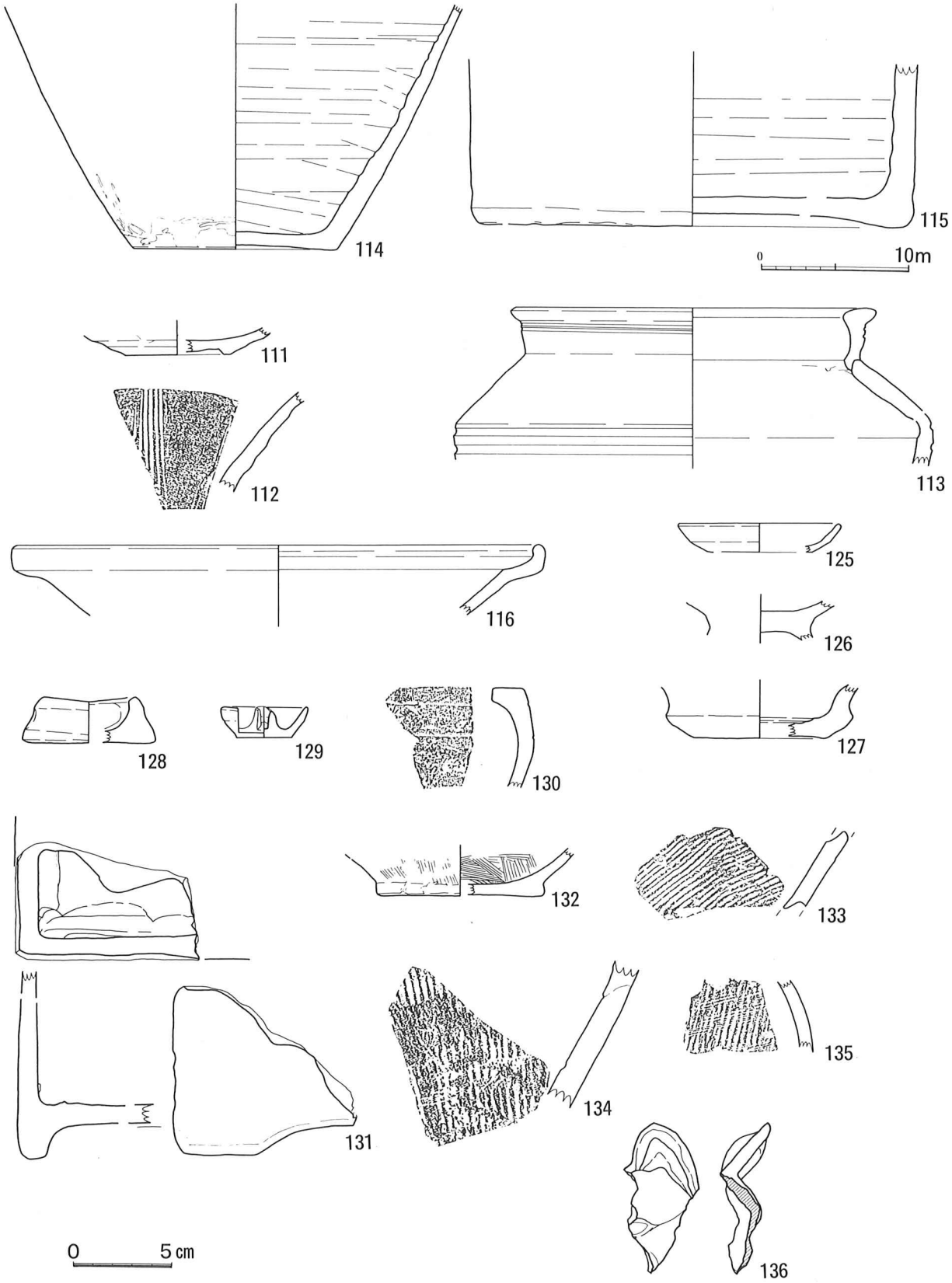
第14図　　出土遺物実測図５



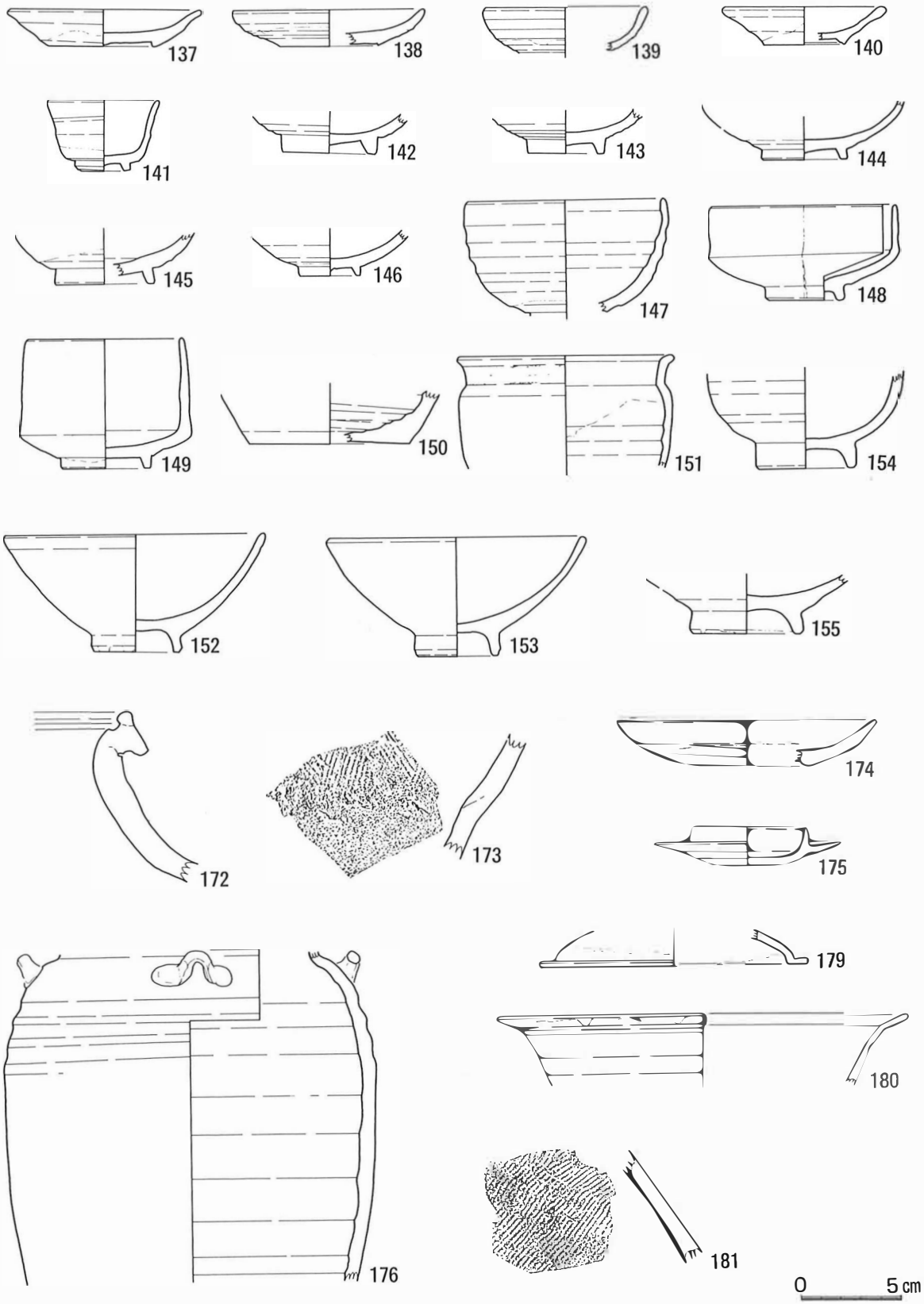
第15図　　出土遺物実測図６



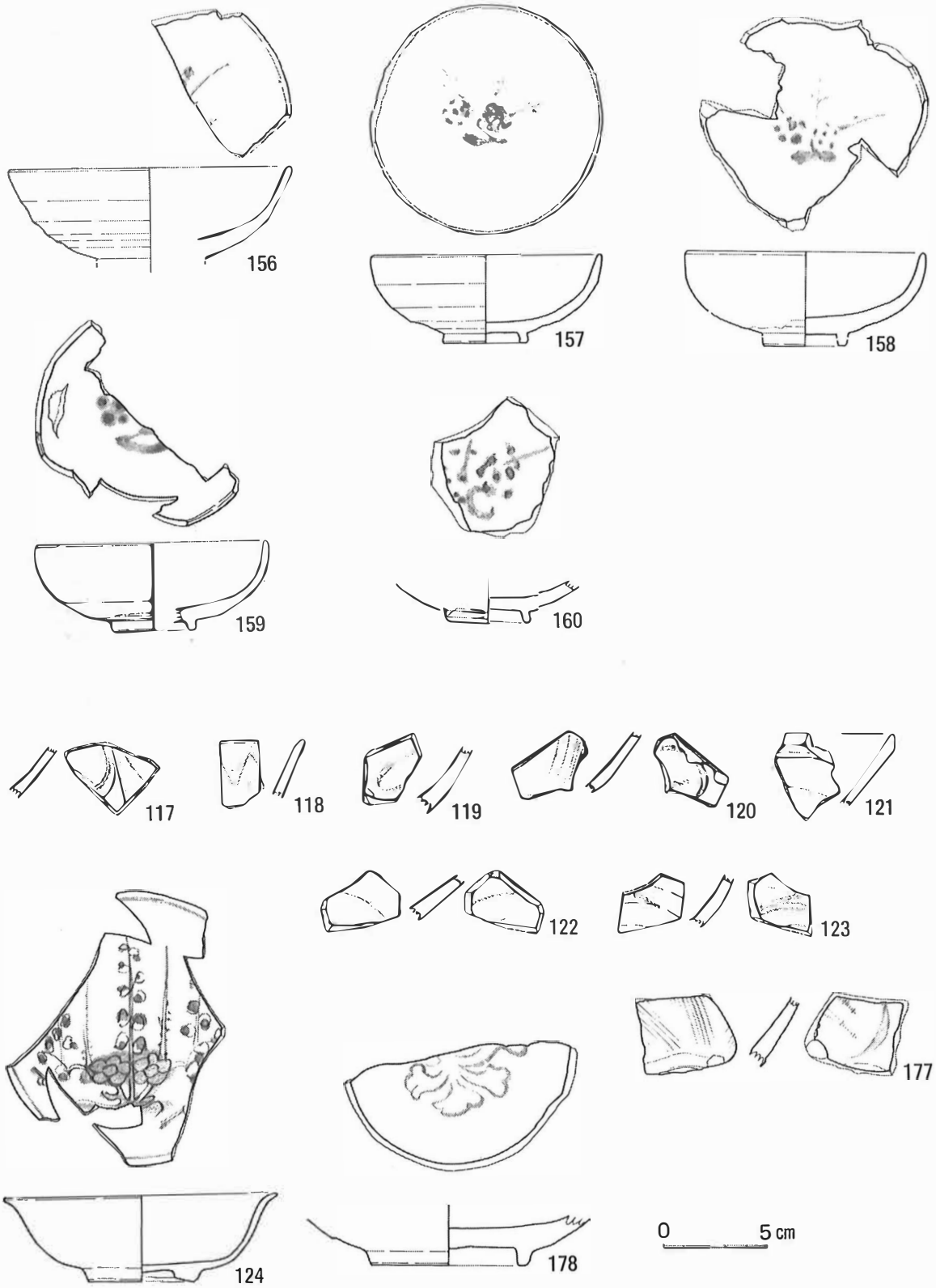
第16図　　出土遺物実測図７



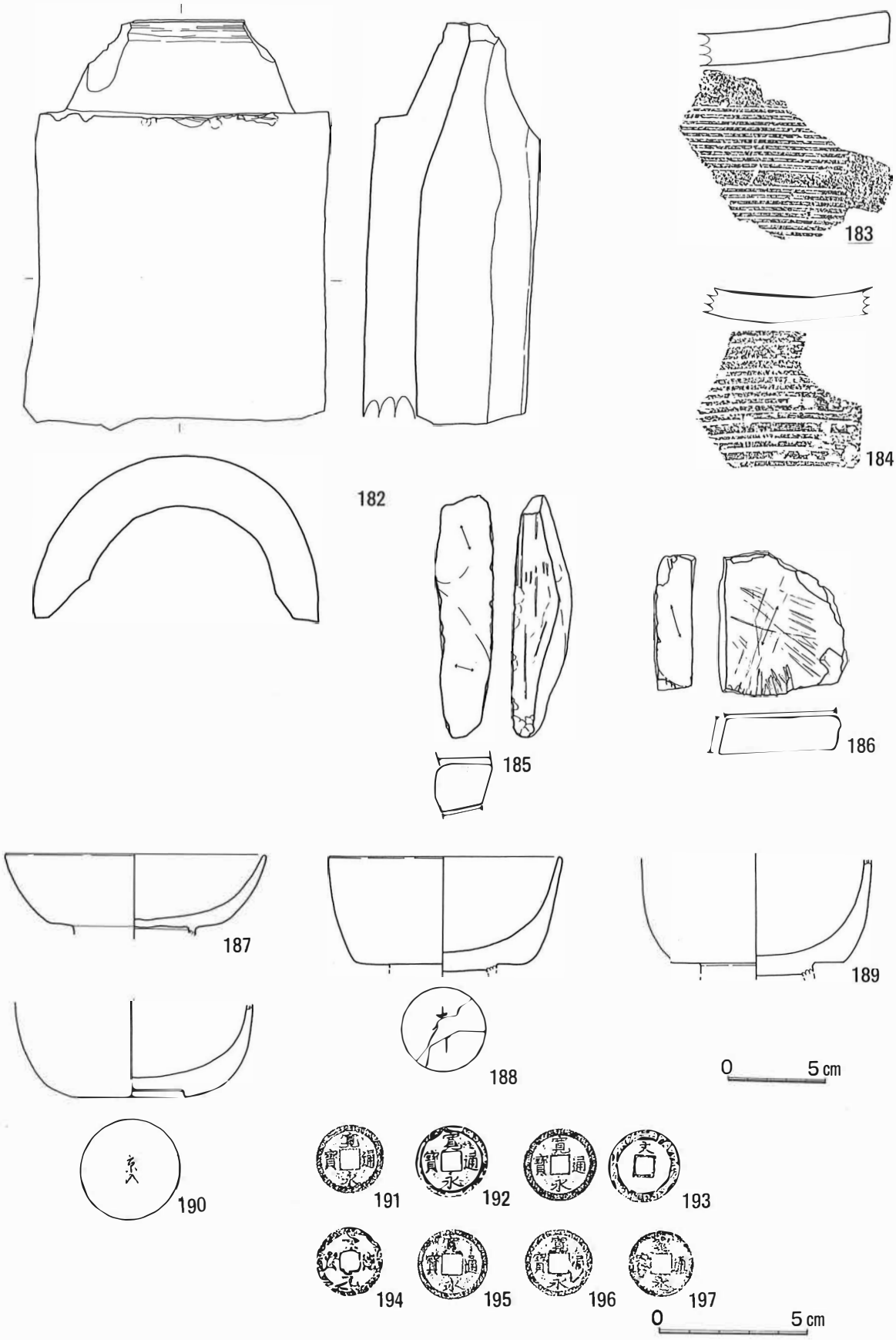
第17図　　出土遺物実測図８



第18図　　出土遺物実測図９



第19図　　出土遺物実測図10



第 20 図　　出土遺物実測図 11

第５表　出土遺物観察表１

（１～136．183．187～193.195.196が第１次調査分）

番号	種別	器種	口径 底径 器高(cm)	出土地点	産地	生産年代	備考
1 第10図		山茶碗	9.7 5.3 3.4	溝１	瀬戸・美濃	12C後半	白瓷系Ⅲ 1/4 存
2 第10図		山茶碗	— 4.7 —	溝１	瀬戸・美濃	12C前半	白瓷系Ⅱ 1/4 以下存
3 第10図		山茶碗	— 7.4 —	溝１	瀬戸・美濃	12C後半	白瓷系Ⅲ 1/4 存
4 第10図		山茶碗窯系擂鉢	— — —	表土	瀬戸・美濃	12C～13C	底部1/3 存
5 第10図		山茶碗	— — —	溝１	瀬戸・美濃	15C初	白瓷系Ⅹ 1/4 存
6 第10図		山茶碗	— 4.5 —	石組１	瀬戸・美濃		1/4 存
7 第10図	陶器	小皿	11.6 5.4 2.6	溝１	瀬戸・美濃	15C後半	1/4 存
8 第10図	陶器	小皿	11.7 5.7 2.6	溝１	瀬戸・美濃	15C後半	1/4 存
9 第10図	陶器	鉢	22.2 8.6 6.4	溝１	瀬戸・美濃	15C前半	灰釉 1/4 以下存
10 第10図	陶器	碗 天目	12.0 — 3.8	表土	瀬戸・美濃	15C後半	1/4 以下存
11 第10図	陶器	碗 天目	— 4.7 3.3	溝１	瀬戸・美濃	15C後半	底部　1/4 存
12 第10図	陶器	碗 白天目	11.1 3.7 6.7	溝１	瀬戸・美濃	17C前半	ほぼ完存
13 第10図	陶器	碗 白天目	10.5 3.6 7.0	溝１	瀬戸・美濃	17C前半	2/3 存　底部全周
14 第10図	陶器	碗 白天目	— 3.7 —	溝１	瀬戸・美濃	17C前半	1/3 存　底部全周
15 第10図	陶器	碗 天目	— 3.5 —	溝１	瀬戸・美濃	18C後半	1/4 存　底部全周
16 第10図	陶器	皿	12.8 7.4 2.9	溝１	瀬戸・美濃 （志野）	17C初頭	菊花 1/2 存　底部全周
17 第10図	陶器	皿	11.15 6.0 2.0	溝１	瀬戸・美濃 （志野）	17C初頭	1/2 存 底部1/2 存
18 第10図	陶器	皿	11.1 5.9 2.5	溝１	瀬戸・美濃 （志野）	17C初頭	1/3 存 底部1/2 存
19 第10図	陶器	皿	9.9 5.4 1.6	溝１	瀬戸・美濃 （志野）	17C初頭	1/3 存
20 第10図	陶器	皿	10.9 5.8 1.85	溝１	瀬戸・美濃	17C前半	灰釉　1/4 存
21 第10図	陶器	皿	13.1 7.9 2.8	溝１	瀬戸・美濃	17C前半	丸皿・灰釉 1/4 以下存
22 第10図	陶器	碗	— 3.7 —	溝１	瀬戸・美濃	18C後半	1/3 存　底部全周
23 第10図	陶器	碗	— 5.9 —	表土	瀬戸・美濃	18C後半	1/4 以下存 底部1/2 存
24 第10図	陶器	碗	10.5 4.0 5.2	溝１	瀬戸・美濃	18C後半	灰釉 平碗「せんじ」 2/3 存
25 第11図	陶器	碗	9.2 4.0 5.4	溝１	瀬戸・美濃	18C後半	灰釉と鉄釉の掛け分け（鼠錆碗） 1/2 存 底部1/2存
26 第11図	陶器	碗	8.2 — —	溝１	瀬戸・美濃	18C後半	ヨロイ茶碗 1/4 以下存
27 第11図	陶器	皿	— 7.3 —	溝１	瀬戸・美濃	18C後半	灰釉・鉄絵・ 型紙ずり 2/3 存　底部全周
28 第11図	陶器	香炉	5.9 3.3 4.4	溝１	瀬戸・美濃	18C後半～19C代	2/3 存　底部全周
29 第11図	陶器	仏飯器	7.4 4.1 5.5	溝１	瀬戸・美濃	18C後半～19C	灰釉 2/3 存
30 第11図	陶器	仏飯器	7.0 4.5 5.4	溝１	瀬戸・美濃	18C後半～19C	灰釉 脚台部ほぼ完存
31 第11図	陶器	仏飯器	7.5 4.2 4.95	溝１	瀬戸・美濃	18C後半～19C	灰釉 2/3 存
32 第11図	陶器	仏飯器	— 4.5 —	溝１	瀬戸・美濃	18C後半～19C	灰釉 ほぼ完存
33 第11図	陶器	仏飯器	— 4.6 —	溝１	瀬戸・美濃	18C後半～19C	灰釉 脚台部　ほぼ完存

番号	種別	器種	口径 底径 器高(cm)	出土地点	産地	生産年代	備考
34 第11図	陶器	片口鉢	15.5 — —	溝１	瀬戸・美濃	18C後半～19C代	1/4 以下存
35 第11図	陶器	片口鉢	— — —	溝１	瀬戸・美濃	18C後半～19C代	1/4 以下存
36 第11図	陶器	行平鍋蓋	5.4 16.1 3.5	表土	瀬戸・美濃	18C後半～19C	1/2 存
37 第11図	陶器	行平鍋	— — —	表土	瀬戸・美濃	18C後半～19C	1/4 以下存
38 第11図	陶器	花器	— 5.7 —	溝１	瀬戸・美濃		2/3存　底部1/2完存
39 第11図	陶器	徳利	— 10.2 —	溝１	瀬戸・美濃	19C～	1/2 存　底部完存
40 第11図	陶器	灯明皿	11.1 4.6 1.9	溝１	瀬戸・美濃	18C末～19C初	タール・灰の付着物が目立つ　完存
41 第11図	陶器	灯明皿	11.3 5.4 1.9	溝１	瀬戸・美濃	18C末～19C初	タール・灰の付着物が目立つ ほぼ完存
42 第11図	陶器	灯明皿	10.3 5.0 1.8	溝１	瀬戸・美濃	18C末～19C初	タール付着 開口部欠損 1/3 存
43 第11図	陶器	灯明皿	10.1 4.7 2.1	溝１	瀬戸・美濃	18C末～19C初	開口部欠損 1/4 存
44 第11図	陶器	灯明皿	10.9 4.6 2.4	溝１	瀬戸・美濃	18C末～19C初	開口部欠損 1/3 存
45 第11図	陶器	灯明皿	10.3 4.5 2.2	溝１	瀬戸・美濃	18C末～19C初	スス・灰・タール付着 2/3 存
46 第11図	陶器	陶製円板	— — —	溝１	瀬戸・美濃	18C末～19C初頭	鉢破片 石臼ずりの道具？ 1/4 以下存
47 第12図	陶器	擂鉢	— — —	溝１	瀬戸・美濃	16C初 （大窯第１段階）	1/4 以下存
48 第12図	陶器	擂鉢	— — —	溝１	瀬戸・美濃	16C後半 （第３四半期） （大窯第１段階）	1/4 以下存
49 第12図	陶器	擂鉢	— — —	溝１	瀬戸・美濃	16C後半 （大窯第４段階）	1/4 以下存
50 第12図	陶器	擂鉢	33.5 13.9 15.5	溝１	瀬戸・美濃	18C前半	1/4 以下存
51 第12図	陶器	擂鉢	36.7 — —	溝１	瀬戸・美濃	18C前半	1/4 以下存
52 第12図	陶器	擂鉢	27.6 — —	溝１	瀬戸・美濃	18C前半	1/4 以下存
53 第12図	陶器	擂鉢	— — —	溝１	瀬戸・美濃	18C前半	1/4 以下存
54 第12図	陶器	擂鉢	— — —	溝１	瀬戸・美濃	18C後半	1/4 以下存
55 第12図	陶器	擂鉢	— — —	石組１	瀬戸・美濃	18C後半	1/4 以下存
56 第12図	陶器	擂鉢	31.0 — —	溝１	瀬戸・美濃	18C後半	1/4 以下存
57 第12図	陶器	擂鉢	— 14.7 —	溝１	瀬戸・美濃	18C前半	1/4 以下存
58 第13図	陶器	擂鉢	35.5 15.3 14.4	溝１	瀬戸・美濃	19C	1/3 存
59 第12図	陶器	擂鉢	— — —	溝１	瀬戸・美濃	18C後半	1/4 以下存
60 第13図	陶器	擂鉢	— — —	溝１	瀬戸・美濃	18C後半	1/4 以下存
61 第13図	陶器	擂鉢	— — —	溝１	瀬戸・美濃	18C後半	1/4 以下存
62 第13図	陶器	擂鉢	— — —	溝１	瀬戸・美濃	17C前半	1/4 以下存
63 第13図	陶器	碗	11.1 4.5 7.0	溝１	肥前	17C中葉	2/3 存　底部完存
64 第13図	陶器	碗	12.9 4.7 8.2	溝１	肥前	17C中葉	2/3 存　底部完存
65 第13図	陶器	碗	— 5.0 —	溝１	肥前	17C中葉	1/3 存 底部ほぼ完存
66 第13図	陶器	皿	— 4.5 —	溝１	肥前 唐津	17C後半～18C前半	青緑釉皿 底部完存

第６表　出土遺物観察表２

番号	種別	器種	口径 底径 器高(cm)	出土地点	産地	生産年代	備考
67 第13図	陶器	碗	— 3.8 —	溝１	肥前 唐津	17C後半～18C前半	櫛描高台 1/4 以下存
68 第14図	陶器	皿	19.7 9.8 5.65	溝１	肥前 京焼写し	17C後半～18C前半	高台内刻印「笋」 銘　ほぼ完存 山水文
69 第14図	陶器	皿	— 4.9 —	溝１	肥前 京焼写し	17C後半～18C前半	内面に崩れた楼閣 山水文 1/4 以下存
70 第14図	陶器	皿	— 5.0 —	表土	肥前 京焼写し	17C後半～18C前半	内面に崩れた楼閣 山水文　1/4以下存 底部1/2 存
71 第14図	陶器	皿	— 5.1 —	溝１	肥前 京焼写し	17C後半～18C前半	内面に崩れた楼閣 山水文 底部完存
72 第14図	陶器	碗	9.5 4.3 6.05	溝１	肥前 現川	17C後半～18C前半	外　白土イッチン 内　白土刷毛目 2/3 存
73 第14図	磁器	皿	19.7 8.1 3.55	溝１	肥前	17C中葉	漆継ぎ 2/3 存　底部完存
74 第14図	磁器	皿	20.5 10.0 4.4	溝１	肥前	17C後半～18C前半	見込　蛇の目釉ハギ・コンニャク判 五弁花　漆継ぎ
75 第14図	磁器	皿	13.4 8.2 3.05	溝１	肥前	17C後半～18C前半	見込・コンニャク判五弁花　2/3 存
76 第15図	磁器	皿	12.9 7.7 3.1	溝１	肥前	17C後半～18C前半	墨弾き 見込・コンニャク判 五弁花　1/3 存
77 第15図	磁器	皿	13.5 8.1 3.0	溝１	肥前	17C後半～18C前半	1/4 以下存
78 第15図	磁器	皿	9.2 4.8 2.2	溝１	肥前		ルリ釉輪花 墨弾き ほぼ完存
79 第15図	磁器	仏飯器	8.5 3.9 6.1	溝１	肥前	17C後半～18C前半	脚台部完存
80 第15図	磁器	皿	8.7 — —	溝１	肥前	17C後半～18C前半	1/4 以下存
81 第15図	磁器	小坏	5.9 3.1 5.7	溝１	肥前	17C後半～18C前半	高台内「大明年製」 銘（釉が白濁、 磁器の焼成失敗）
82 第15図	磁器	段重ね （蓋杓）	12.4 7.85 9.5	溝１	肥前	17C後半～18C前半	1/2 存
83 第15図	磁器	碗	10.3 4.1 4.7	溝１	肥前	18C前半	見込 蛇の目釉ハギ ほぼ完存
84 第15図	磁器	碗	11.1 4.4 5.65	溝１	肥前	18C前半	1/2 存
85 第15図	磁器	碗	10.2 4.1 5.6	溝１	肥前	18C前半	口錆 高台内「大明年製」 銘　2/3 存
86 第15図	磁器	碗	11.5 4.3 6.1	溝１	肥前	18C前半	見込 蛇の目釉ハギ 1/2 存
87 第15図	磁器	碗	10.6 4.0 4.7	溝１	肥前	18C前半	見込 蛇の目釉ハギ 2/3 存
88 第15図	磁器	碗	9.9 4.0 4.7	溝１	肥前	18C前半	コンニャク判 2/3 存
89 第15図	磁器	碗	— 4.7 —	溝１	肥前	18C前半	底部完存
90 第15図	磁器	碗	— 5.1 —	表土	肥前	18C前半	高台内に銘あり 1/4 存
91 第15図	磁器	碗	8.8 — —	溝１	肥前	18C前半	1/4 以下存
92 第15図	磁器	碗	9.9 — —	表土	肥前	18C前半	1/4 以下存
93 第16図	磁器	碗	9.3 2.8 4.4	溝１	肥前	18C後半	小丸碗 氷裂地に菊花 2/3 存
94 第16図	磁器	碗	10.3 4.1 4.7	溝１	肥前	18C後半	小丸碗 氷裂地に菊花 1/2 存
95 第16図	磁器	碗	10.2 — —	溝１	肥前	18C後半	小丸碗 氷裂地に菊花 1/4 以下存
96 第16図	磁器	碗	10.3 4.1 4.6	溝１	肥前	18C後半	1/2 存　底部完存
97 第13図	磁器	碗	8.7 3.05 4.6	溝１	肥前	18C後半	1/2 存
98 第16図	磁器	碗	7.0 2.75 3.7	溝１	肥前	18C後半	1/2 存
99 第16図	磁器	そば猪口	7.8 4.6 5.65	溝１	肥前	18C～19C前半	高台内に銘あり 2/3 存

番号	種別	器種	口径 底径 器高(cm)	出土地点	産地	生産年代	備考
100 第16図	磁器	油壺	— 4.8 —	溝１	肥前	18C～19C前半	1/3 存
101 第16図	磁器	そば猪口	7.6 — —	溝１	肥前	18C～19C前半	1/4 以下存
102 第13図	磁器	紅皿	6.0 2.6 1.15	表土	肥前	18C～19C前半	白磁型押し成形 1/2 存
103 第13図	磁器	花器	13.2 — —	表土	肥前	18C～19C前半	1/4　以下存
104 第13図	陶器	捏鉢	— — —	溝１	常滑	15C	口縁 1/4　以下存
105 第13図	陶器	捏鉢	— — —	溝１	常滑	15C	口縁 1/4　以下存
106 第13図	陶器	甕	— — —	溝１	常滑	15C後半	N字口縁 1/4　以下存
107 第13図	陶器	捏鉢	— 16.7 —	溝１	常滑	———	底部　1/4 以下存
108 第13図	陶器	甕	— — —	溝１	常滑	15C後半	たたき目 1/4 以下存
109 第13図	陶器	甕	— — —	表土	常滑	———	たたき目 1/4 以下存
110 第13図	陶器	小鉢	13.8 8.9 9.3	溝１	志戸呂	17C末～18C初	1/4 存
111 第17図	陶器	小皿	— 5.3 —	溝１	志戸呂	17C中～18C	底部　1/4 存
112 第17図	陶器	擂鉢	— — —	溝１	志戸呂	17C	1/4 以下存
113 第17図	陶器	甕	18.6 — —	溝１	志戸呂	18C前半	鉄釉 口縁部2/3 存
114 第17図	陶器	壺	— 14.0 —	溝１	志戸呂	17C	胴下半2/3 存
115 第17図	陶器	甕	— 30.3 —	表土	志戸呂	18C前半	径の1/4 存
116 第17図	青磁	皿	26.6 — —	溝１	中国	13C	内面劃花文 龍泉窯系 1/4 以下存
117 第19図	青磁	碗	— — —	溝２	中国	13C	内面劃花文 1/4 以下存
118 第19図	青磁	碗	— — —	溝１	中国	13C	外面鎬連弁文 龍泉窯系 1/4 以下存
119 第19図	青磁	碗	— — —	溝１	中国	13C	内面劃花文 龍泉窯系 1/4 以下存
120 第19図	青磁	碗	— — —	溝１	中国	13C	内面劃花文 同安窯系 外面櫛掻文
121 第19図	白磁	碗	— — —	溝１	中国	12C前半	口縁部玉縁状に肥厚・外面ピンポール・白磁碗Ⅳ類
122 第19図	白磁	碗	— — —	溝１	中国	12C前半	1/4 以下存
123 第19図	青磁	碗	— — —	溝１	中国	13C	内面劃花文 同安窯系 1/4 以下存
124 第19図	磁器	皿（鉄）	13.2 5.05 4.3	溝１	中国（明）	17C中葉	蛇の目高台 底部完存
125 第17図	土師質 土器	皿	8.1 — —	溝１			灯明皿に使用 1/4 存
126 第17図	土師質 土器	坏	— — —	溝１		11C	足高高台 底部1/2 存
127 第17図	土師質 土器	坏	— 6.6 —	溝１		11C	1/3 存
128 第17図	土師質 土器	坏	4.7 6.8 —	溝１			灯明具？ 1/4 存
129 第17図	土師質 土器	皿	4.4 2.8 1.6	溝１		18C後半～19C	ひょうそく （灯明具） ほぼ完存
130 第17図	土師質 土器	火鉢	— — —	溝４		18C～19C	回転印刻文 1/4 以下存
131 第17図	土師質 土器	火鉢	— — —	表土		18C～19C	1/4 以下存
132 第17図		壺	— 8.0 —	表土		弥生時代後期～ 古墳時代前期	壺底部 1/4 以下存

第７表　出土遺物観察表３

番号	種別	器種	口径 底径 器高(cm)	出土地点	産地	生産年代	備考
133 第17図	須恵器	甕	—— —— ——	溝１		古墳時代？	1/4 以下存
134 第17図	須恵器	甕	—— —— ——	溝１		古墳時代？	1/4 以下存
135 第17図	須恵器	甕	—— —— ——	溝１		古墳時代？	1/4 以下存
136 第17図		人形	—— —— ——	表土			きつね 1/4 以下存
137 第18図	陶器	皿	9.5 5.3 1.85	溝１	瀬戸・美濃	17C中葉～17C後半	志野釉(タール状?) 炭化物付着 ほぼ完存
138 第18図	陶器	皿	9.5 4.9 1.8	溝１	瀬戸・美濃	17C後半～18C	1/3 存
139 第18図	陶器	皿	8.0 —— ——	溝１	瀬戸・美濃	17C前半	1/4 以下存
140 第18図	陶器	皿	7.9 4.1 1.85	溝１	瀬戸・美濃	17C前半	1/3 存
141 第18図	陶器	小盃	5.5 2.7 3.5	表土	瀬戸・美濃	17C前半	見込みにタール状 炭化物 完存
142 第18図	陶器	碗	—— 4.6 ——	溝１	瀬戸・美濃	18C中葉	底部完存
143 第18図	陶器	碗	—— 3.7 ——	溝１	瀬戸・美濃	18C中葉	腰錆　底部完存
144 第18図	陶器	碗	—— 4.2 ——	溝１	瀬戸・美濃	18C後半	底部完存
145 第18図	陶器	碗	—— 5.0 ——	溝１	瀬戸・美濃	18C後半	底部1/2 存
146 第18図	陶器	碗	—— 3.0 ——	溝１	瀬戸・美濃	18C後半	底部完存
147 第18図	陶器	碗	—— 9.75 ——	表土	瀬戸・美濃	18C後半	1/4 存
148 第18図	陶器	碗	9.2 3.7 4.65	溝１	瀬戸・美濃	18C後半	2/3存　平碗「せいじ」　鉄釉と灰釉の左右掛け分け
149 第18図	陶器	筒型碗	7.6 4.35 6.45	溝１	瀬戸・美濃	19C前半	1/4 存
150 第18図	陶器	徳利	—— 8.0 ——	溝１	瀬戸・美濃	19C	1/4 存
151 第18図	磁器	香炉	10.6 —— ——	表土	瀬戸・美濃	19C	1/4 存
152 第18図	陶器	碗	12.9 4.2 5.95	溝１	肥前 唐津	17C前半	1/2 存　底部完存
153 第18図	陶器	碗	12.7 4.0 5.95	溝１	肥前 唐津	17C前半	1/2 存
154 第18図	陶器	碗	—— 4.7 ——	溝１	肥前 唐津	17C前半	高台内施釉 底部完存
155 第18図	陶器	碗	—— 5.4 ——	溝１	肥前 唐津	18C後半	高台内施釉 底部完存
156 第19図	陶器	碗	13.6 —— ——	溝１	肥前	18C前半	1/4 存
157 第19図	陶器	碗	11.4 4.0 4.6	溝１	瀬戸・美濃	19C前半	鉄・呉須絵 ほぼ完存
158 第19図	陶器	碗	11.4 4.0 4.6	溝１	瀬戸・美濃	19C前半	鉄・呉須絵 1/2 存
159 第19図	陶器	碗	11.1 4.0 4.3	溝１	瀬戸・美濃	19C前半	鉄・呉須絵 1/3 存
160 第19図	陶器	碗	—— 3.8 ——	溝１	瀬戸・美濃	19C前半	鉄・呉須絵 底部完存
161 第16図	磁器	筒型碗	8.3 4.45 6.2	溝１	瀬戸・美濃	19C前半	ほぼ完存
162 第16図	磁器	碗蓋	3.1 8.8 2.2	溝１	瀬戸・美濃	19C	ほぼ完存
163 第16図	磁器	皿	7.25 2.1 1.5	表土	瀬戸・美濃	19C	紅皿 1/4 存
164 第16図	磁器	皿	8.9 2.1 1.4	溝１	瀬戸・美濃	19C	紅皿 2/3 存
165 第16図	磁器	碗	9.5 3.8 5.35	溝１	肥前	18C前～中葉	1/2 存
166 第16図	磁器	碗	8.1 3.2 4.1	溝１	肥前	18C前～中葉	1/4 以下存
167 第16図	磁器	碗	7.6 3.3 4.05	溝１	肥前	18C前～中葉	1/2 存
168 第16図	磁器	碗	—— 4.1 ——	溝１	肥前	18C前～中葉	1/4 存
169 第16図	磁器	仏飯器	—— 4.0 ——	溝１	肥前	18C後半	脚台部完存
170 第16図	磁器	仏飯器	6.7 —— ——	溝１	肥前	18C後半	1/4 以下存
171 第16図	磁器	油壺	—— 4.3 ——	溝１	肥前	18C後半	2/3 存
172 第18図	陶器	甕	—— —— ——	溝１	常滑		1/4 以下存
173 第18図	陶器	甕	—— —— ——	溝１	常滑		1/4 以下存
174 第18図	陶器	小皿	12.8 6.2 2.3	石組１	志戸呂 初山？	15C	1/4 存
175 第18図	陶器	灯明皿	9.2 3.6 2.0	溝１	志戸呂	18C前半	1/3 存
176 第18図	陶器	壺	—— —— ——	溝１	志戸呂 初山		1/3 存
177 第19図	青磁	碗	—— —— ——	溝１	中国	13C	劃花文 同安窯系 1/4以下存周囲摩滅
178 第19図	青磁	鉢	—— 7.4 ——	溝１	中国	13C後半	漆継ぎ 見込花文 底部1/2 存
179 第18図	陶器	行平蓋	—— 13.2 ——	表土		19C	1/4 以下存
180 第18図	陶器	鉢	20.4 —— ——	溝１			1/4 以下存
181 第18図	須恵器	甕	—— —— ——	表土		古墳時代？	1/4 以下存

番号	種類	最大長（cm）	最大幅（cm）	厚さ（cm）	出土地点	備考
182 第20図	丸瓦	———	15.4	2.6	溝１	
183 第20図	棧瓦	———	———	1.7	表土	
184 第20図	棧瓦	———	———	1.4	表土	

番号	種別	石質	最大長 最大幅 厚さ(cm)	重さ（g）	出土地点	調整	備考
185 第20図	砥石	凝灰岩	12.4 2.7 2.4	100	溝１		
186 第20図	砥石		7.4 6.1 1.8	100	溝１		瓦の転用

番号	種別	器種	最大長 最大幅 厚さ（cm）	出土地点	産地	生産年代	備考
187	漆器	椀	13.2 —— ——	溝１			高台付
188	漆器	椀	11.9 —— ——	溝１			高台付 「大十」カ墨書
189	漆器	椀	—— —— ——	溝１			高台付
190	漆器	椀	—— 5.4 ——	溝１			「京入」朱書

番号	種別	名称	出土地点	備考
191	銭貨	寛永通宝	溝１	
192	銭貨	寛永通宝	溝１	
193	銭貨	寛永通宝	溝１	文銭
194	銭貨	景徳元宝	溝１	

番号	種別	名称	出土地点	備考
195	銭貨	寛永通宝	溝１	
196	銭貨	寛永通宝	溝１	
197	銭貨	寛永通宝	表土	

《コメント１》

出土陶磁器類と浅間大社の信仰

渡　井　正　二

出土陶磁器類のグラフ（第３表）を見ると、16Ｃまでに比べ17Ｃ以降が急に多くなっているが、年代の古い物より新しい物が多く残っているということは当たり前のことなのかもしれない。また、宝永４年(1707)の富士山の噴火にともなう地震や安政元年(1848)の大地震などによって浅間大社が被害を受けているので、その際には当然什器類の被害も多かったであろう。そうしたことを考えると、17Ｃから19Ｃ前半にかけての陶磁器類の出土が多いのは当然であるといえる。

また、陶磁器類の産地については、17Ｃから18Ｃ前半にかけて肥前物が多く18Ｃ後半から瀬戸美濃物が多くなっているのは、その産地の事情によるとも考えられる。瀬戸美濃焼は文化年間(1804～1816)加藤民吉が九州に渡り磁器の製法を習得して今日の発展をみるに至ったが、江戸中期には肥前産の磁器が出回り瀬戸美濃焼が衰微したことに関係しているのだといえる。なお17Ｃから18Ｃ前半にかけて志戸呂焼が少しみられるが、志戸呂焼は距離的に近く有利であったと思うが、もともと生産量の少ない産地なので数が少なかったのであろう。

しかし、そうした外的一般的理由ではなく、こうした多くの什器を必要とした浅間大社の信仰についても考えてみる必要があろう。まずその一つが、浅間大社を訪れる富士登山者である。

富士登山が、鎌倉時代の修験者によって始まり、室町時代には富士行といわれる富士参詣（登山）の道者が浅間大社を訪れるようになった。室町時代狩野元信によって描かれた「絹本著色富士曼荼羅図」（富士山本宮浅間大社蔵　重文）を見ると、東海道を西からやってきた道者（登山者）が、浅間大社の湧玉池で水垢離を取って村山を経て富士山をめざしている姿が描かれている。江戸時代になると富士参詣者はその数を増し、富士宮市史（右の表）によると、18Ｃ中ころには村山で一番勢力のあった大鏡坊の道者到着人数が約100人であり、全体では200人くらいだったと推定される。しかも、富士山御縁年といわれる庚申の年、元文５(1740)年には1440人が、間の申年といわれた享保13(1728)年には311人の道者が到着している。

大鏡坊道者到着人数（富士宮市史）

年　　号	西　暦	道者数
宝永元甲申年	1704	600
享保13戊申年	1728	311
元文５庚申年	1740	1440
寛保元辛酉年	1741	100
寛延３庚午年	1750	100
寛延４辛未年	1751	100
寛政12庚申年	1800	2000
文化３丙寅年	1806	430
文化５戊辰年	1808	360
文化７庚午年	1810	200
文化９壬申年	1812	679
文化11甲戌年	1814	480

特に出土陶磁器類の数を増している18Ｃ後半から19Ｃにかけてというのは、寛政（1789～1800）ころより関東方面で盛んになった富士講による登山者数の増大した時期である。関西方面からの登山者の多かった富士宮口でも、大鏡坊文書によると寛政12庚申(1800)年には2000人の道者があり、文化年間の道者到着人数も急激にふえている。（右の表参照）

この時期、寛政から文化・文政のころ浅間大社でも参詣者の世話をした社家が、春長坊・清長坊・御炊坊・鎖是内記（内記坊）・同式部の５坊あった（「富士の研究Ⅰ富士の歴史」井野邊茂雄）といわれるほどで、浅間大社はかなりの登山者を迎ていたのである。この登山者の浅間大社参詣と出土陶磁器類の数と関わっているといえないだろうか。

次に、富士修験や富士講の富士参詣（登山）の面からだけではなく、浅間大社本来の信仰の面からも考えてみなくてはならない。

荒らぶる火の山を鎮めるための神として祭られた浅間大社が、水源に下りてきて水源地を支配するようになり、火の神を鎮めるための神としてばかりではなく、水徳を以て農神に変化し今日の浅間大社の信仰を完成してきた。しかし、南北朝時代の天皇方や足利方の浅間大社への所領の寄進、戦国時代の今川氏や武田氏による所領の寄進・社殿の造営は単に信仰とばかりは考えられず、むしろ浅間大社の世俗的な権力を利用しようとしたものではなかったかと思われる。当時、浅間大社はこの地方を代表する権力をもち、大宮司を中心とする武士団として大宮城を形成し、そこが活動の中心となっていた。

しかし、江戸時代の徳川家康による社殿の造営は、戦国時代とは逆に世俗的な権力を解体し宗教的な面に専念させるためのものであったといえる。そのため、江戸時代になると宗教的な活動が盛んに行われたものと思われる。「富士の研究Ⅱ浅間神社の歴史」（宮地直一・広野三郎）を見ると「天正の神事帳」に66度「慶安の神事帳」に98度の神事が記録されている。その内、１月から４月の主な神事を上げてみると次のようである。

１月　元旦神事（１日）・田遊び神事（４日）・よそう合之飯（５日）
　　七草神事（７日）・仁王会（８日）・天上小豆粥（15日）
２月　月次神事（毎月１日）・彼岸講（彼岸）
３月　小猿会神事（３日）・柴振舞（未ノ日）
４月　山宮御神幸（初未ノ日）・初申神事〈大祭礼〉（初申ノ日）・夏振舞（15日）

これらの神事の内容を見ていくと、所々に食物や酒を供応した様子が述べられている。

仁王会　　札を掛くる木は、山宮の百姓より出す。・・・百姓へは大宮司より酒一樽を出して餐應す・・・法事以前に出仕の衆へは、焼餅に納豆を添へ茶を餐應し法事の後には、芋・豆腐・海苔の吸い物を餐し酒を出す。

彼岸講　　牛蒡・肴・酒等を出して一同に餐す

四月初申神事（大祭礼）　　惣社家中へは一汁三菜及び酒を餐す
　　神饌は御供六膳・御粉餅六膳・御菜六膳・瓶子一・四天飯・廿三社飯の六種

このように、神事では、参加者に食物や酒が振る舞われているし、神饌として多くの食器が使われているなど、陶磁器類の使用も増えていったものと思われる。特に、18C後半以降瀬戸美濃焼の日常雑器類が多く使われていることなどもうなずけるところである。

さらに神事の内容の中に、次のような記事が載せられている。

山宮御神幸（４・11月初未ノ日）　神饌は廿四の土器御酒

四月初申神事（大祭礼）　高机を据え、廿四御酒・土器三個・瓶子二個を置く。
　　土器酒の儀あり・・・奉幣使は・・・土器二個を取りて酒を受け・・・

近世土師質土器は、かわらけ（土器）と呼ばれ祭祀用器として用いられていたので、18C後半以後に土師質土器が見られるのは、祭祀に使われたかわらけ（土器）の類ではないかと思われる。

調査範囲が浅間大社の限られた地点であり、出土陶磁器類がどういう使用目的の物であったか断定はできないが、富士登山者や浅間大社の神事と関わるものとしてとらえてみた。17Cから19C前半にかけての陶磁器類の出土が多いのは、江戸時代中期以後の富士登山者の増加や浅間大社の神事の盛行と関わるものだといえると思う。

《コメント２》

浅間大社境内遺跡について

若　林　淳　之

富士宮市と浅間大社が合意のもと、御手洗川畔（大きく言えば神田川であろうが、古地図等によれば、湧玉池から通称石橋を経て、神田橋＝交番のある所までが御手洗川で、この橋以南を神田川と呼んでいたようであるので、この古い慣例に従った）に水辺公園を設置することに関連して、現浅間大社の境内地の一部の発掘調査を実施して来た。

当該発掘調査地域は、浅間大社にとってどのような意味をもった場所なのかを明らかにすることは、この遺跡の最終的評価にもかかわることなので、先ずもって考える必要があるように思うのである。

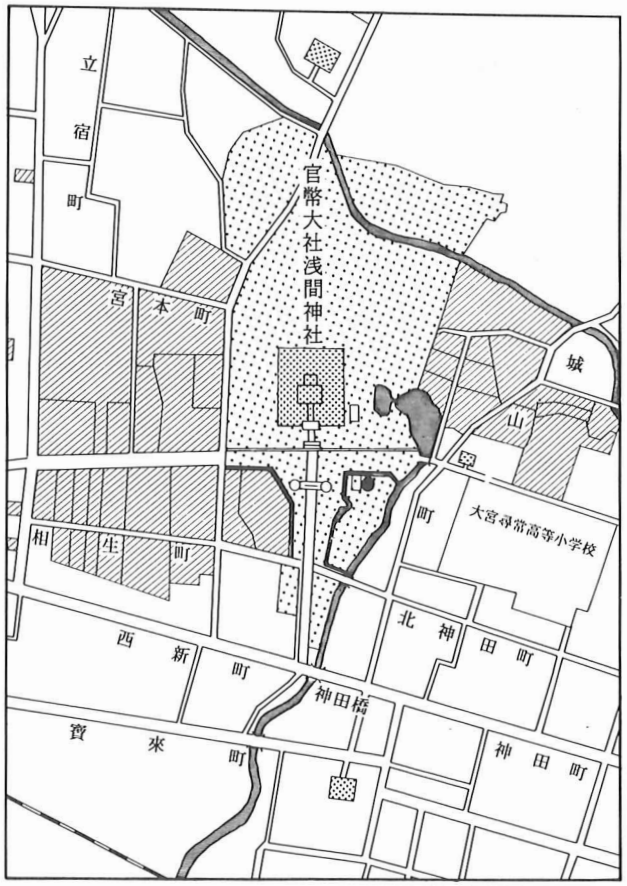
浅間大社が所蔵する寛文10年(1670)２月27日、幕府寺社奉行に提出した「浅間大社絵図面」（宝永５年写）によると、大社正面、平場の南に当たるこの部分には何も記載されていないことがわかる。

けれども、旧案主家の富士信造氏が作製したという、「旧神職社僧屋敷址図」（**図**）（作製年代は明らかでは無いが、図を見ると身延線が描かれており、貴船・東両小学校も書かれていることから昭和初期に書かれたものであろうことが考えられる）によれば、発掘地域には「元社僧大蓮寺（亡所）」があったらしいことがわかるのである。勿論この社僧大蓮寺が何故亡所となったものであるのかの説明はない。しかし亡所となるためには、何等かの理由があった筈で、その理由はあげて慶応末年(1868)から明治初年にかけて、この神社に吹き荒れた廃仏毀釈の動きによるものであったと思われるのである。

周知のように、富士山本宮浅間大社に見る幕末維新期の廃仏毀釈の嵐は激しく、大宮司家富士亦八郎（重本）不在のなかで、こうした政治的措置に一人前面に出て対応したのは別当家の宝幢院見晃であった。

諸国の神社仏閣はすべて同様であったが、慶応４年(1868)３月維新政府の神仏分離の政治的措置は「今般御一新に付、諸国大小之神社におゐて、僧形に而別当或は社僧抔與相唱候輩復飭之上、神道を以神祇可奉仕旨被仰出候に付上京仕候」（『浅間神社の歴史』673頁）とあるように、それまで神仏混合していた神社仏閣を神と仏に分離し、僧形で神社に仕える別当、社僧などは復飭せよということから始まった。

例えば富士山大別当宝幢院見晃は、復飭つまり還俗しろというもので、宝幢院見晃



●…元社僧大蓮寺（亡跡）

図　旧神職社僧屋敷址図（部分）
（『富士の研究Ⅱ　浅間神社の歴史』1973　より引用、加筆）

は富士神一郎と改名するということが、「僧形に而別当或は社僧抔與相唱候輩復餝之上」という事に相当する現れであった。

こうした別当の復餝に関連して、これに附合する供僧たちの復餝も進行し「清泰院は清泰大次郎、閼伽井坊は閼伽井釼三郎（のち赤井から今井へ）、蓮蔵坊は蓮蔵秀次郎（のち木下から宮崎へ）、金蔵坊は金蔵六郎、大圓坊は大圓直四郎、法泉坊は法泉新作（のち大西）、浄蓮坊は浄蓮竹四郎と称し、末寺大蓮院（寺）は大蓮徳三と改めた」（『前出書』）というのである。

今回発掘調査した場所が、先にも指摘したように大蓮寺（院）にかかわるものであったと考えられ、この大蓮寺については、富士山本宮大別当富士神一郎が、明治２年(1869)９月、別当家の株を金千両で津田鉄太郎の家来である羽田萬に譲り渡した時の附帯文書の一項に

一、大蓮寺領之儀は、大宮司ゟ年々請取候事。尤都合次第、追而再興之時節に候はゞ、是又隨意に可取計事。

とあって、大蓮寺は大別当家にかかわりの深いものであることは勿論、大宮司家にもかかわりのあるものであることが理解されるとともに、慶応から明治初頭にかけては、寺領は残っていたらしいが、大蓮寺として建物が存在していたのかどうかは明らかではない。

以上のように、今回発掘調査した地域が、浅間大社の神仏習合時代の社僧大蓮寺（院）の敷地付近であったとすると、この遺跡の発掘結果について、種々の評価が可能になってくるように思われるのである。そうした評価の一、二について、触れて見ると、次のような問題が浮かび上がって来るように思えるのである。

（１）遺物に見る社僧のくらし

もしこの遺跡が社僧大蓮寺に深くかかわっているものであったとすれば、この大蓮寺が亡所となる経過が明らかでは無いので、俄に断定することは出来ないが、遺物の出土状況から見て、必ずしも豊かなくらしではなかったのでは無いかと思われるのである。

即ち大蓮寺が亡所となる過程が、意図的に何処かに転居したものとすれば、生活にかかわりの深い重要なものは、転居にともなって何処かに移されたということが考えられ、従ってこの地に捨てられた陶器片は不要になったガラクタであったと言えるかもしれない。そのことは同時に大蓮寺が亡所となるためには、ここの関係者が死去したり、また一家離散した後に、誰かが来て後片付けをした残り物がガラクタ化したとも考えられるが、何れであったにしても、豊かさを感じさせてくれるものは乏しいように思われるのである。

いっぽう社僧の住む大蓮寺であったとすれば、多くの陶器片にまじって仏具、神具のようなものの一部でも発見されてもしかるべきと思われるのであるが、そうした事実に遭遇出来なかったことも、これら社僧の存在は浅間大社にとって、どういうものであったのか、将来考えて見なくてはならない問題であるようにも思うのである。

ともあれ、社僧大蓮寺の遺構の中から出土した遺物からは、豊かさを感じるものが乏しかったことは、別の意味から言えば浅間大社の権威らしきものも、かつて程輝いたものではなかったのでは無いかと思うのである。

即ち江戸を中心とした富士講が著しく江戸町人の中にもてはやされ、これがかえって幕府の弾圧をうける結果になったものであることは周知のところであるが、こうした富士講の発達が、そのまま浅間大社の経済的、財政的な安定と連動していなかったのでは無いかと思われるのである。

即ち遠江・三河・尾張・伊勢・志摩等広く上方から富士山を訪れる道者が、富士川を渡って、本来なら高原山を経て、金谷橋を経て浅間大社に詣で、そこから富士山頂をめざすのが旧来からの道すじであったものが、富士川を渡った道者たちは、高原を経由することなく、入山瀬、久沢等凡夫川沿いに杉田、村山に達して後登頂を目ざし、浅間大社に立ち寄ることはしなかった。そのため浅間大社は韮山代官所に願書を提出し、浅間大社に立ち寄るよう規制して欲しいと歎願していることにも、豊かさを考える上で注目しなくてはならない。

またイギリス初代公使オールコックが富士登山をした時、村山大鏡坊に止宿したことは有名であるが、浅間大社にそうしたかかわりの見られないことも忘れてはならないところである。

このように幕末期の浅間大社の動向には、古くからの浅間大社の権威はともかく、その権威に相応する経済的、財政的基盤にかげりが見えていたのが、社僧大蓮寺跡の発掘結果であったのであろう。また、そうしたかげりこそ富士亦八郎が戊辰戦争に当たって、駿州赤心隊を組織し、東征軍に加担した背景であり、そこには、浅間大社の現状を打開しようという隠された狙いがあったのかもしれない。

（2）出土した陶器片について

本遺跡の発掘担当者たちは、どちらかと言えば大変地味な発掘に、大変熱心に当り、陶器片を中心に、多数の遺物を掘り上げ整理していた、評価さるべき発掘であった。

掘り上げた遺物、とりわけ多数の陶器片を整理し、その産地等を特定したことは注目すべきことであった。私は、かねがね埋蔵文化財を調査する多くの研究者たちが、掘り上げた陶器片の産地等を特定する才能の豊かさには敬意を表してきた。

しかしそうした調査研究の中で、生活に用いる陶（磁）器について、それがどのように流通していたか、流通形態について積極的な発言が見られなかったことは、残念なことであると思っていた。

浅間大社境内遺跡、これは社僧大蓮寺の跡であると考えているのであるが、ここから発見された常滑焼、美濃焼等々の陶器は誰がここまで運んで来たのか、地域の生活文化の形成を考える上で極めて重要なことであると思っている。つまり富士山信仰にかかわりのある先達たちであるのか、それともこれら先達に情報の提供をうけた商人たちであったのか、今後検討さるべき課題であるように思う。

とりわけ富士山麓地帯は天水場の村人が多い。こうした天水場の村人にあっては、天水（雨水）を溜める桶とか甕が必要であるが、最終的には甕が衛生的で長期間利用できるということで普及するのである。これらの甕はどうも常滑焼の甕であるように思われるのであるが、こうしたことを含めて、陶器の流通組織を解明することが必要であるように思われるのである。

最後に私は、この浅間大社境内遺跡は、幕末のころ亡所となったという社僧大蓮寺の跡であるというのが、最も合理的であると考えるのであって、それは廃仏毀釈前後における浅間大社の動向を知る上で貴重な手がかりを与えてくれるものであると思っている。しかし発掘担当者の中には、これとは違った理解もあるようであるが、それも許容される考え方であって、それは結末はどれが最も合理的であるかということによって、決めるものであると思っている。

報告書抄録

ふりがな	せんげんたいしゃいせき
書名	浅間大社遺跡
副書名	神田川ふれあい広場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	富士宮市文化財調査報告書
シリーズ番号	第22集
編著者名	渡井　英誉　　渡井　正二　　若林　淳之
編集機関	富士宮市教育委員会
所在地	〒418　静岡県富士宮市弓沢町150　　TEL 0544-22-1111(代)
発行年月日	西暦　1996年３月29日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
せんげんたいし ゆせき 浅間大社遺跡	ふじのみやし 富士宮市 みやちょう 宮町1404-1	22207	市番号 76 県番号 富士宮市 30	35° 13′ 24″	138° 36′ 49″	第１次調査 19940822～ 19941007 第２次調査 19950904～ 19950930	300 202	公園整備事業に伴う事前調査

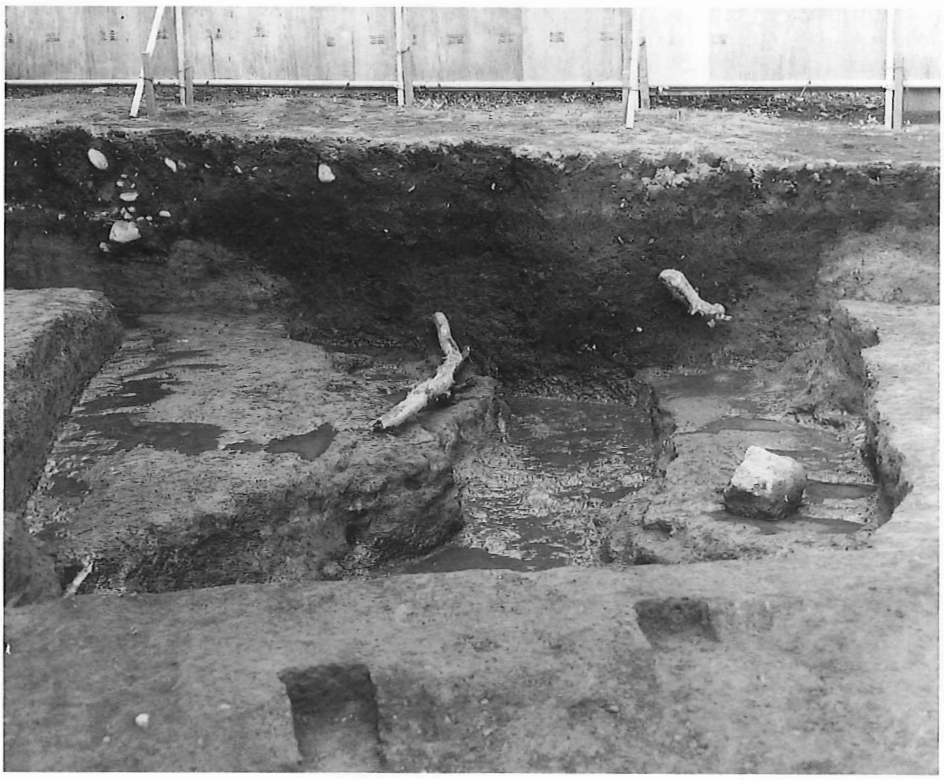
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
浅間大社遺跡		中世～近世	濠　1条 井戸　1基	陶磁器・山茶碗・漆器	浅間大社に関連した濠の発見
		近代～現代	石組・畦畔・溝		

写真図版１　　第１次調査区

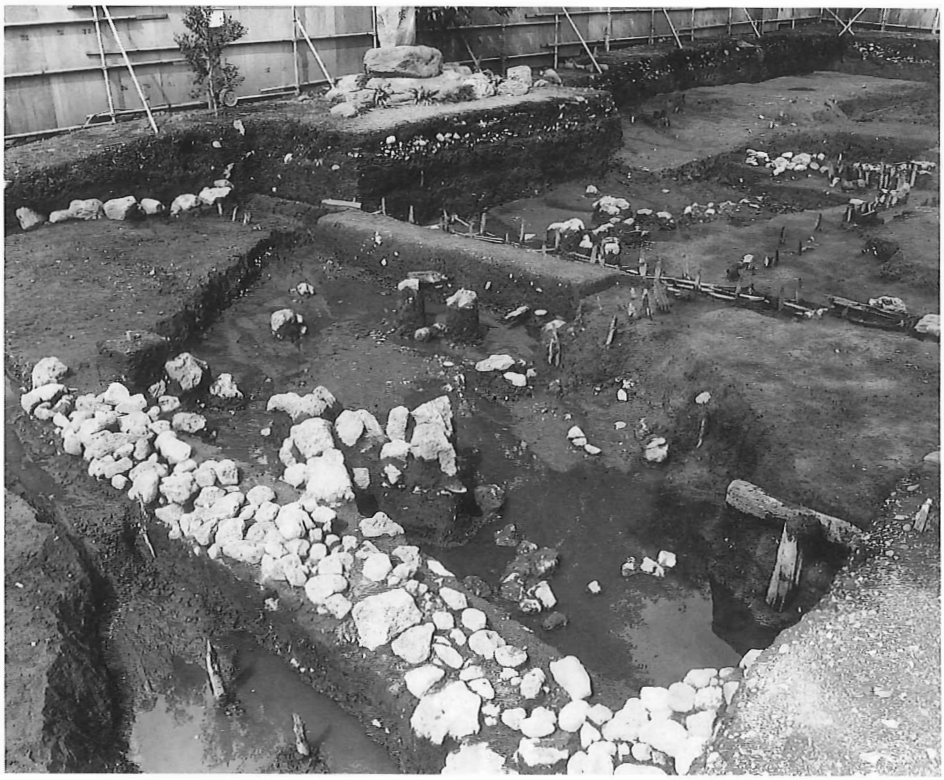
全景
（南→北）

全景
（南→北）

写真図版２　　第１次調査区



溝１　北測部分
（南→北）



全景
（南東→北西）

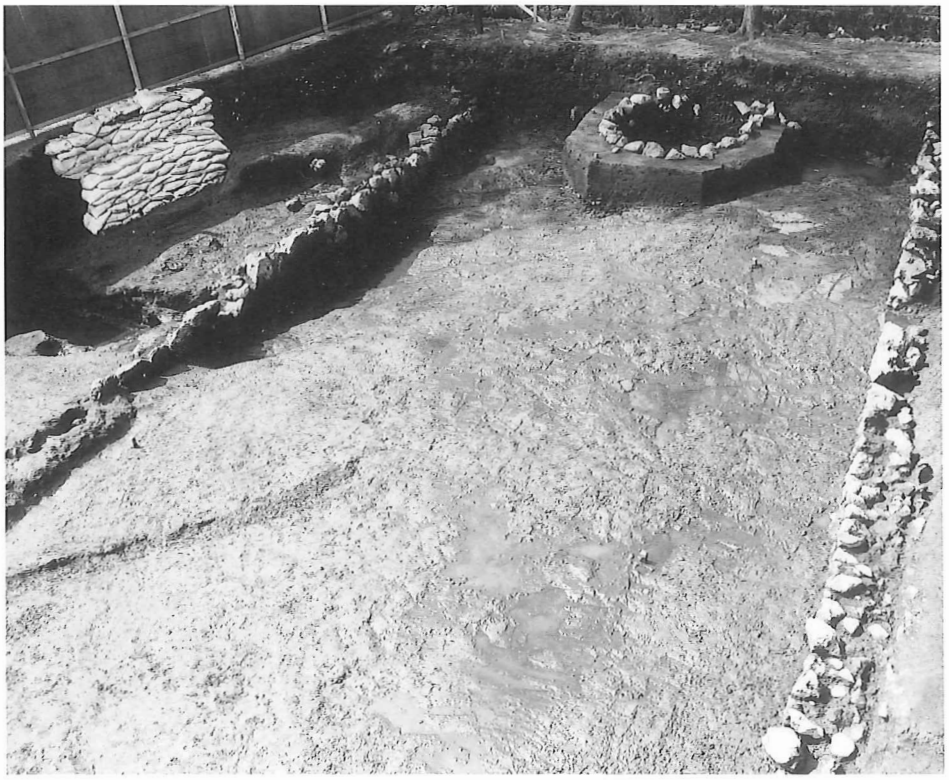
写真図版３　　第１次調査区

溝１　溝２
（東→西）

溝４
（北→南）

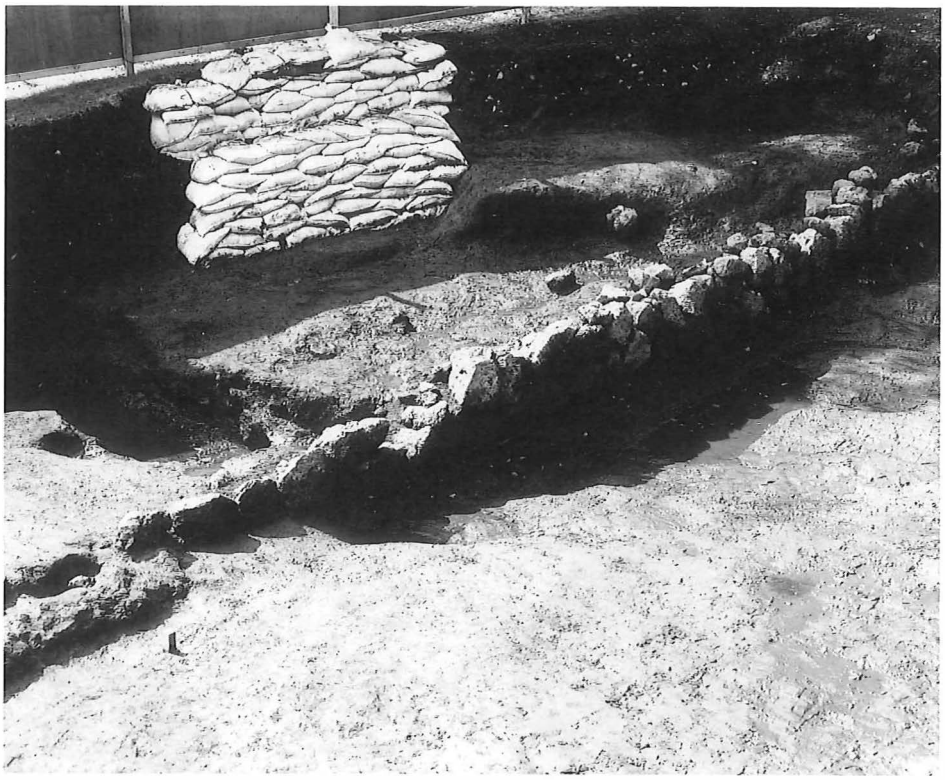
写真図版４　　第２次調査区

全景
（南東→北西）



全景
（東→西）

写真図版５　　第２次調査区



溝１　石組２
（北東一南西）

石組３
（西一東）

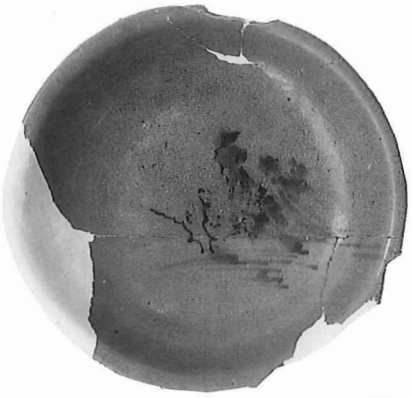
写真図版６　　出土遺物①

28

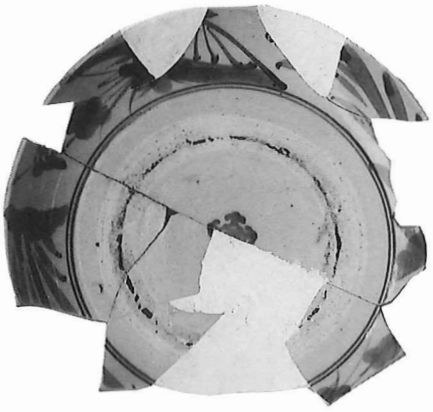
29

40

63

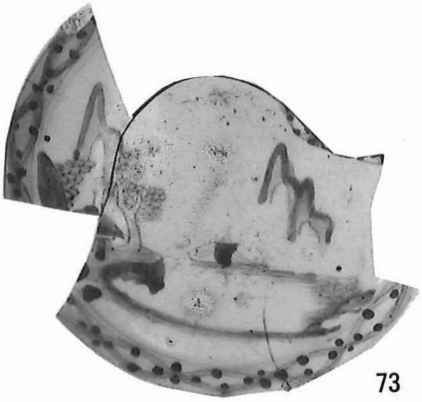


68

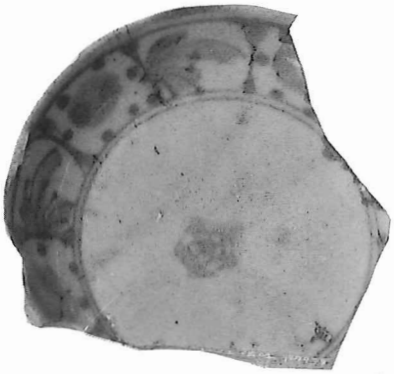


74

72



73



75

写真図版７　　出土遺物②

85

86

87

88

93

96

124

161

188

148

189

157

190

富士宮市文化財報告書　第22集
浅間大社遺跡

平成８年３月29日

編集　富士宮市教育委員会
発行　富士宮市教育委員会
〒418 静岡県富士宮市弓沢町150
TEL (0544) 22－1111(代)

印刷　㈱きうちいんさつ